

筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類

卒業論文

日本のオリエンテーリング競技における
ムラ的コミュニケーションの起源

2025年1月

学籍番号：202110223

氏名：竹下舜人

指導教員：関根久雄（藤澤奈都穂）

目次

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定	
2. 研究方法と章構成	2

第2章 日本人のかかわり意識に関する2つの理論

1. ウチ・ソト論	4
(1) 社会構造の観点からの研究	
(2) 言語行動の観点からの研究	
2. コミュニティ・スポーツ論	5
3. 小括	

第3章 競技特性がつくる集団の性質

1. オリエンテーリングとは	6
2. 調査概要	7
3. 調査結果：オリエンテーリングの競技特性と文化	7
(1)「移動距離・時間の大きさ」が生むかかわり	
(2)「個人でいる時間の長さ」が生むコミュニケーション	
(3)「地図解釈の多様さ」から生まれるコミュニケーション	
(4)「競技の基盤となる地図」作成に伴い強まる一体感	
(5)「開催コストの大きさ」ゆえの組織間の繋がりと若手の活躍	
4. オリエンテーリング競技者の集団構成要因	
5. 小括	

第4章 競技者のふるまいに影響を与える「ムラ」要素

1. 調査概要	8
2. オリエンテーリング競技者の他者へのふるまいとその要因	
(1) 調査結果	8
(2) オリエンテーリングと他競技におけるウチ・ソト・ヨソ意識	
3. オリエンテーリング競技者が認識する「ムラ」要素	
(1) 調査結果	
(2) オリエンテーリング界競技界の「ムラ」意識を醸成する要因	
4. 小括	8

第5章 オリエンテーリング競技者が認識する「ムラ」の起源

1. オリエンテーリング競技者が認識する「ムラ」
2. オリエンテーリング競技と他競技のウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識の違い
3. 場の範囲により変化するかかわり意識

第6章 結論

注

参考文献

参考資料

図目次

図 1 日本人とアメリカ人の性格（[三宅, 1994]より筆者作成）	6
図 2 資格集団と場集団のそれぞれの人間関係（[中根 1967]より筆者作成）	10
図 3 第44回筑波大会の地図（出典：筑波大体育会オリエンテーリング部）	15
図 5 大会参加の流れ（筆者作成）	17
図 4 会場と競技エリア間の案内図（出典：筑波大学体育会オリエンテーリング部）	18
図 6 ルート検討の例（出典：筑波大学体育会オリエンテーリング部）	20
図 7 資格集団と場集団のつながり（筆者作成）	25
図 8 初対面のオリエンテーリング競技者への対応の傾向（他競技における対応が基準）	29
図 9 初対面のオリエンテーリング競技者とつながりを持った経験の程度（筆者作成）	32
図 10 初対面のオリエンテーリング競技者との望ましい付き合い方（筆者作成）	32
図 11 競技者同士のウチ・ソト・ヨソ意識の比較（筆者作成）	34
図 12 オリエンテーリングと他競技の構造（筆者作成）	40
図 13 オリエンテーリング競技者のウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識（筆者作成）	43
図 14 他の競技者のウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識（筆者作成）	44

表目次

表 1 インタビュー回答者のプロフィール（筆者作成）	16
表 2 調査から判明した競技特性とかかわり（筆者作成）	22
表 3 オリエンテーリング競技者が会話をしたことがある相手（筆者作成）	28
表 4 オリエンテーリング競技中に会話をした初対面の人の詳細（筆者作成）	28
表 5 オリエンテーリング競技中に会話をした初対面の人との会話内容（筆者作成）	28
表 6 初対面のオリエンテーリング競技者への会話への姿勢（筆者作成）	30
表 7 オリエンテーリング競技の方が会話しやすい要因（筆者作成）	31
表 8 組織内で一体感を覚えた要因（筆者作成）	36
表 9 オリエンテーリング競技界を「ムラ」と感じた理由（筆者作成）	36
表 10 オリエンテーリング競技界を「ムラ」と感じない理由（筆者作成）	38
表 11 インタビュー回答者の詳細（筆者作成）	39

写真目次

写真 1 競技後、拡大地図に集まり、議論を交わす競技者（筆者撮影）	19
写真 2 24 時頃まで地図の精度に関して議論する運営者（筆者撮影）	21

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定

本稿は、オリエンテーリング競技者のウチ・ソト意識の境界線の柔軟性さを生み出す環境的要因を明らかにすることを目的とする。

オリエンテーリングは森林スポーツの一種で、指定されたチェックポイントを順番に周り、その早さを競う北欧発祥のナヴィゲーションスポーツである。日本での競技人口は1万人にも満たない、いわゆるマイナースポーツである。筆者は大学2年時からこの競技に参加している。

オリエンテーリングを競技していると、年長者の存在感、コミュニティの閉鎖性や競技者間のつながりの強さが目に付くことが多い。年長者の存在感を示す事例としては、新しく競技を始めた学生選手に初対面の年長者がアドバイスをしたことや、学生クラブ（部）が運営する大会に対して年長者が小言を寄せことがある。コミュニティの閉鎖性や競技者間のつながりの強さを示す事例としては、競技者のプライバシーが確保されない些細な話のネタが全国に広まり、さらにそれを当事者が人伝に耳にするようなことや、世界大会に参加する学生選手への支援金が年齢問わず全国から数多く寄せられることがある。このような同じオリエンテーリング競技者であることに親近感を抱き、身内のように接し、気に掛ける人が多い。それゆえに、このスポーツにかかわる人たちの間で、「日本のオリエンテーリング界はムラ的である」という言葉をたびたび耳にする。

しかし、そもそもそのように語られる「ムラ」とは具体的にどのような状態、環境のことを指しているのであろうか。後者は単純な競技人口の少なさに加えて、オリエンテーリング競技特有の文化からくる競技者の接続チャネル、頻度の豊富さに起因していると、経験的に推測できる。例えば、毎週各地で大会が開催され競技者が実際に会ってつながるだけではなく、ランニング SNS アプリなどを通じてバーチャルなつながりも持つ。そのため、競技者は意識せずとも「オリエンテーリング界」という特定のコミュニティに接続される。実際に会話をもったことがない人どうしでも身内のような親しさを覚えることは珍しくない。

ところで、日本には内集団を意味する「ウチ」と、それ以外の集団を意味する「ソト・ヨソ」という言葉が存在し、日本人のウチ・ソト意識の特徴について多くの研究がなされてきた。前者は家族関係や部活動など同じコミュニティに所属する中で親しい関係を持つ領域のことを指し、後者は通勤電車で同乗する人々のような、普段自身とは関係を持たないが、一時的に関係ができるような領域のことを指す [平林・浜 1988,:13-14]。村八分という言葉が「ハヅる」という言葉に変化して日常使いされるように、日本人の仲間・ウチ意識の強さやウチとソトの境界線は伝統的に根強く存在することが伺える。社会人類学者の中根は日本と諸社会(外国)のウチ・ソト意識の違いについて、日本人はウチの者だけで何でもやっていけるという自己中心的・自己完結的な見解を持ち、ソトの者に冷たい態度を取るなど極

端な人間関係を取ると述べている[中根 1967:46-52,64-67]。そして、諸外国の場合、自分たちのような集団が社会にいくつもあり、それらと円滑な関係を保つことによって社会生活が円滑になるという、非排他的な見解と人間関係を取るという [中根 1967:46-52,64-67]。また、三宅は自己対社会の価値観を「ウチ・ソト・ヨソ」の3つの枠組み、家族や親友のように特別親しい層「ウチ」と自己と関連がある層「ソト」と普段自己とは関係ない層「ヨソ」に分類した上で、英米人と日本人を比較し、日本人の特性について次のように述べている。

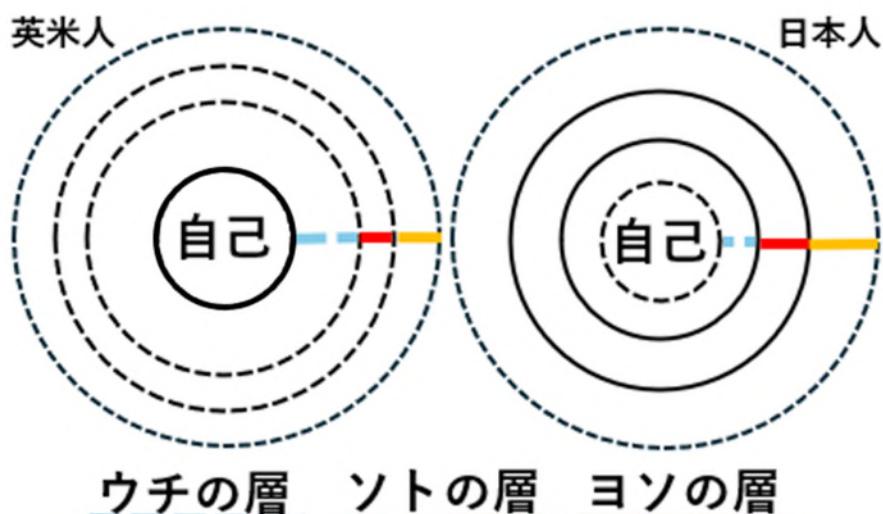


図 1 日本人とアメリカ人の性格（[三宅, 1994]より筆者作成）

日本人の自己はウチの人間と非常に近く、その境界は曖昧である。それ以外のソトとヨソの境界線は明確に区分される。そのため、ウチは親や兄弟のような極めて親密な人間がいる層に対して、私的な会話をすることができる。しかし、ソトやヨソに対しては、私的なことを開示せず、公的な会話のみを行い、場合によっては極めて冷淡で気配りのない行動をとることもある。他方、英米人の自己はウチと一線を画しており、ソトとヨソの層は極めて柔軟性のある層である。そのため、ソトの人間をウチに、ヨソの人間をソトに引き込むコミュニケーションを取るような親しみやすい行動を取ることも多い [三宅 1994:33-36]。

また、日本人はウチ意識を強く持ち、ソト・ヨソへは排他的な意識を持っているが、近年ウチ意識とソト意識の領域に変化が見られるという。NHKが2018年に16歳以上5400人の日本国民に実施した調査によると、家族を大切にする気持ちに変化は少ないが、友人や親戚に全幅の信頼を置いて助け合うような全面的な付き合いを望む人が減っていた[日本放送協会 2018]。この変化は、日本人のウチ意識の対象となる相手が減少し、ソト意識の対象となる相手が増加していることを示すと考えられる。また同調査によると、1973年と2018年

における親戚との望ましい付き合い方について、「何かにつけ相談し、たすけ合えるようなつきあい」（全面的つきあい）が 51.2%から 29.7%へ 20.5 ポイント減少している。その一方で、「一応礼儀を尽くす程度のつきあい」（形式的つきあい）が 8.4%から 26.2%へ 17.8 ポイント増加し、「気軽に行き来できるようなつきあい」（部分的つきあい）が 39.7%から 43.2%へ 3.5 ポイント増加している。さらに、2008 年と 2018 年における友人関係との望ましい付き合い方について、「なにかにつけ相談し、たすけ合えるようなつきあい」（全面的つきあい）が 40.6%から 33.7%へ 6.9 ポイント減少しているが、「ときどき連絡を取り合う程度のつきあい」（形式的つきあい）が 13.4%から 19.4%へ 6 ポイント増加している。そして、1983 年と 2018 年における普段の生活に欠かせないと思うことについては、「家族と話をする」が 79.8%から 76.8%へ 3 ポイント減少していて、「友人と話をする」は 66.1%から 55.8%へ 10.3 ポイント減少している[日本放送協会 2018]。つまり、家族・親戚や親友のような身内・ウチである層においても全面的なつきあいを減らし、形式的・部分的つきあいをする、自分と関連がある時にだけかかわり意識をもつような人間関係を増やしている。それを三宅が提唱したウチ・ソト・ヨソの枠組みに照らし合わせると、日本人のウチの層は縮小し、その分ソトの層が拡大しているということである。

これらのウチ・ソト・ヨソ意識の枠組みは、他の社会や組織においても適用可能である。中根は、「組織・様式は異なっても社会構造は同じ」であり、その枠組みは「社会の構造を適切にはりうるモノサシ」であると述べている [中根 1967;10-24]。つまり、冒頭で触れたオリエンテーリング界にも、ウチ・ソト・ヨソ意識の枠組みを用いることができる。

三宅が提唱したウチ・ソト・ヨソの枠組みでオリエンテーリング界を捉えると、それは非日本的な、言い換えると英米的なものである。その業界を「ムラ」と評する人の多さや、その言葉から受け取るウチへの閉鎖的な印象とは異なり、同じ競技者であれば初対面であっても親しくコミュニケーションを取り、ソトの人間をウチに引き込むようなやり取りを行う。例えば、大会会場では、年齢や所属などを問わずコミュニケーションが交わされ、初対面であっても会話を楽しむ人が散見される。このように、一般的に日本人のウチ意識の対象が限定的かつ硬直的であるのに対し、オリエンテーリング競技者のウチ意識とソト意識との境界線は非常に柔軟である。

しかし、そのような認識、すなわち「オリエンテーリング競技者のウチ意識とソト意識の境界線は柔軟である」という認識は正しいのであろうか。日本のオリエンテーリング界はムラ的という表現は、年長者の発言権の強さやコミュニティ内のつながりの強さなど、古来の日本の村らしさを表し、まさしくウチ意識の強さを強調している。同時に、「ムラらしい」という言葉は、もっぱらウチ・ソト意識の境界の強さに言及する際に語られるものであり、筆者が体感しているウチ・ソト意識の境界線の曖昧さや柔軟性とは相容れない。ウチ意識の強さの強調している「ムラ」という言葉を使う人がいる一方で、自分がウチ・ソト意識の柔軟性を感じているのはなぜなのか。日本のオリエンテーリング界の人々が持つウチ・ソト意識の構造は不明瞭である。さらに、他スポーツと比較してその要素には共通点があるのか、

あるいはオリエンテーリング競技の独自の文化ゆえ発生する事柄なのかという疑念も生じる。

本稿の冒頭でも述べたように、本稿ではこれらの問い合わせを踏まえ、本稿は日本のオリエンテーリング競技における競技性やコミュニケーションの取り方を他のスポーツと比較しながら分析し、オリエンテーリング競技者のウチ・ソト意識の境界線の柔軟性を生み出す環境的要因を明らかにする。これは、スポーツ競技同士を比較してウチ・ソト意識を考察する点で、単にオリエンテーリング競技だけのことではなく、スポーツが日本人の硬直的なウチ・ソト意識を変化させることを考察する上でも一定の意義を有する研究課題である。

2. 研究方法と章構成

本論文では、ウチ・ソト意識についての理論を「ウチ・ソト論」とする。その学術論文を基盤とし、オリエンテーリング大会の参与観察と競技者へのアンケート調査を通してオリエンテーリングのムラしさやウチ・ソト意識を変えている原因を分析する。

第2章では、先行研究を通して本論の前提となるウチ・ソト意識とは何かを整理する。本研究の前提であるウチ・ソト意識を整理するとともに、関連して中根が提唱する人間関係の種類と社会構造についても取り上げる。また、コミュニティ形成への手段としてスポーツが効力を持つとするコミュニティ・スポーツ論にも触れ、スポーツがコミュニティ形成の役割を担うことを分析視座として提示する。

第3章と第4章ではオリエンテーリングの説明に始まり、その調査と観察を通し、第2章の前提を基にオリエンテーリング競技者が感じるムラ要素やウチ・ソト意識を検討し、分析する。第3章では、オリエンテーリングのムラ・ウチ要素を形成する大きな要因として他スポーツと比較しても独特な特徴を持つオリエンテーリング大会に注目し、いくつかの大会への参与観察を通して発見した大会の独自性や競技特性、集団の構成要因を分析する。第4章では、大会への参与観察を基に行うアンケート調査から、競技者が実感しているムラ・ウチ要素と、その原因についてについて分析する。他スポーツの経験がある人のアンケート結果に注目し、その差異からオリエンテーリングと他スポーツのウチ・ソト意識を分析する。

第5章では、参与観察とアンケート調査の分析を基に日本のオリエンテーリング界をムラらしくしている要因をまとめる。そして、他競技と比較して、ウチ・ソト意識などかわり意識の違いを考察する。

第2章　日本人のかかわり意識に関する2つの理論

人間関係の構造や人々のかかわり意識、コミュニティ論は、文化人類学や社会学、心理学といった学問分野において議論されることが多い。しかし、その中でもウチ・ソト論や社会関係資本など複数の理論や、体育学の分野と融合した理論から言及される場合があり、先行研究は多岐に渡る。本章では本研究の問い合わせ、「オリエンテーリング競技者の柔軟なウチ・ソト意識を生む要因には何があるのか」「その要因には他スポーツと共通点はあるのか」に関連する文献・理論を中心に検討し、整理する。

本論文では、スポーツ競技者同士のコミュニケーションの手段と内容を中心に検討を進めるため、言語行動の観点から研究したウチ・ソト論を中心に、スポーツがコミュニティ形成を促進するというコミュニティ・スポーツ論に触れる。

1. ウチ・ソト論

(1) 社会構造の観点からの研究

日本人のウチ・ソト意識、人間関係の構造についての研究には、社会構造の観点からの研究や言語行動の観点からの研究がある。

中根は、いずれの社会も「資格」と「場」のいずれかの機能を持ち、その社会の人々の社会的認識における価値観と密接な相関関係を持っているという。「資格」は氏など生まれながら個人が持つ属性や、学歴・地位・職業のような生後個人が獲得した属性など、社会的個人の一定の属性の共通性を重要視し、後者は地域や所属機関のように一定の枠により個人が集団を構成するような場の共有を重要視する[中根 1967:26-35]。中根は、日本は専ら後者、すなわち場を強調する社会であると述べている[中根 1967:26-35]。また、場による集団の一体感は、社員旅行や飲み会などエモーショナルかつ全面的な個々人の集団参加を基盤として強調・強制されて集団の閉鎖性と孤立性を高めている[中根 1967:42-46]。その結果として集団化を促進しており、場の構成者の距離を縮める一方で、「ウチの者」「ヨソの者」というような対外的な差別意識を醸成するという[中根 1967:42-46]。

加えて、中根は社会集団の構造を人間関係の結びつき方の形式によって上司・部下関係などの同列に置かれない者を結ぶ序列「タテ」の関係と同僚関係などの同質・同列である者を結ぶ分類としての階層「ヨコ」の関係の二つに分類できると述べている[中根 1967:70-71]。前者は成員の部下になると集団に加入できるという意味で組織の下方において外向きに開放されている一方で、特定成員との関係設定が組織として定着してしまうため、成員の位置交代ができず弾力性がない特徴をもつという[中根 1967:116-127]。後者は明瞭に規定された集団成員のルールに該当するものが自動的に入団可能である点で排他的である一方で、成員であれば新参者であっても他の成員と同列に立ち、成員個人の位置交代は可能であるという[中根 1967:116-127]。中根は両者の違いを、英米人と日本人において教師間、教師

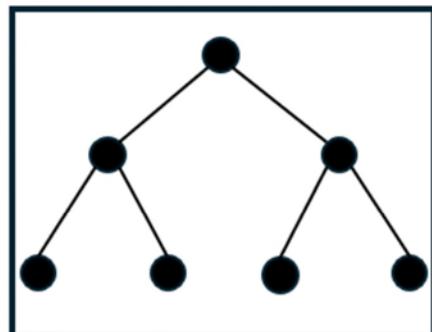
と学生間の人間関係を比較して説明している。イギリスでは、教師陣は一括して同僚であり、同じ科の同僚は先輩後輩関係なくファーストネームで呼び合い、同類のよしみやリラックスした雰囲気、親しさという同類の世界を持つという[中根 1967:88-94]。他方、日本では、教授・助教授・講師・助手・学生という序列により結び付けられており、同質のものの中で序列によって差をつけるため同僚との連帯意識は低调であり、教授は同僚の教授より下の序列にあたる人と関係がより親しい場合があるという[中根 1967:88-94]。そして、場による集団がもつ孤立性こそがタテの関係を生み出す要因であること、タテの関係内部にもヨコの関係というものはあるが、集団内部に限定された関係であるため、組織構造としてのヨコの関係ではないことを特筆している[中根 1967:75]。

つまり、社会構造の観点からみると、日本人のウチ・ソトという意識は「場」の集団の人間的感情に比重を置く活動により醸成される一体感から発生する閉鎖性、孤立性が原因となり生まれている。そして、国民単位で集団の構成要因が資格・場のいずれかに定まるわけではないため、日本人の集団が場によって構成される傾向があっても、集団の構造を分析し、どちらの機能を有しているのかを吟味する必要がある。

[資格集団（ヨコの関係）]



[場集団（タテの関係）]



ヨコの関係

タテの関係

場とそれがもたらす一体感

図 2 資格集団と場集団のそれぞれの人間関係（[中根 1967]より筆者作成）

しかし、本当に集団の性質は場と資格のどちらかに二分されるのであろうか。中根が提唱した集団の構成要因である場・資格に類似した概念として、コミュニティとアソシエーションがある。社会学者のマッキーバーによると、前者は、ある一定の範域において営まれている自然発生的に生まれる共同生活と定義しており [MacIver 1917:12]、その社会的特徴は社会的類似性、共通する社会的通年、共通の慣習、共属感情である [MacIver 1921:9] とする。

後者は、共通の関心や諸関心の追求のために人為的に設立された社会生活の組織体であり、コミュニティを基盤として派生する [MacIver 1950:8-11]。他方、横嶋は、アソシエーション内部からコミュニティ的な集団が派生する場合があると述べる [横嶋 2018:7]。例えば、会社はアソシエーションの究極的な形であるが、同じ空間・時間を共有する集団でもあるため、連帯感や絆・友愛が生まれ、独特の行動様式などが共有される場合があるという [横嶋 2018:8]。

コミュニティとアソシエーションについての議論を踏まえると、それぞれ場と資格の集団の機能・定義と類似していることがわかる。そこで本稿では、会社の集団的な性質を中根が「場」と述べる一方で、横嶋はアソシエーションから派生したコミュニティとも考えられると述べていることに注目したい。これを踏まえると、集団の性質は単に資格と場の二つに分類されるわけではなく、資格集団が場集団としての機能を有する場合があると捉えられる。

（2）言語行動の観点から研究

三宅は、ヨソは自分がどう思われようが支障がない相手であるため日本人は極めて冷淡且つ気配りのない行動を取ることも多いが、相手との共通項を見つけ、相手の情報が増えて自分との関連ができると、対応がヨソからソトへと変化すると述べている [三宅 1994:29-39]。

玉瀬・馬場は日本人の対人関係について、非常に親密で遠慮のいらない関係「ウチ」、学校などの知人で遠慮が必要な関係「ソト」、自分とは関係がなく遠慮を必要としない関係「ムエン」の3つに分類していた [玉瀬・馬場 2003:43-50]。玉瀬らは、ソトの関係において人がどのくらい主張（アサーション）を変化させるのかをアンケート調査している。対人関係において同じ状況でもかかる対象が異なることで行動を抑制・発揚する場合、それを「場」を認知していると表現し、ソト関係では自身と相手の心理的距離により自身の行動を規定していると述べている [玉瀬・馬場 2003:43-50]。つまり、言語行動の観点からみると、日本人のウチ・ソト意識は話者の心理的距離間で決定しており、聞き手がそのどこに位置付けられているかにより話者は話し方や気づかいを変化させる。したがって、話者がどのような場で、どのような言葉づかいやふるまいをするのかを分析することで、集団の構造や構成員が持つふるまいの傾向を捉えることができる。

2. コミュニティ・スポーツ論

コミュニティ・スポーツ論は、スポーツがコミュニティ形成に効力を持つという理論である。その用語は、スポーツに対して地域住民相互の接触を深め、新しい時代に合致したコミュニティ活動の場形成へ貢献することが期待され、生まれた言葉である [伊藤・松村 2009:41-42]。経済企画庁が 1973 年に発表した「経済社会基本計画—活力ある福祉社会のために」においてコミュニティ・スポーツという語が登場して以来、行政や体育研究者に対

してスポーツがコミュニティ形成の有効な手段であるという認識を与えた [伊藤・松村 2009:41-42]。

海老原らは一定の範域をもつ地域社会において、コミュニティ形成の上でコミュニティ・スポーツが重要な役割を担っていると述べる [海老原・江橋 1981:50]。そして彼らは、「コミュニティをコミュニティたらしめる要件である社会的相互作用性とコミュニティ感情に對して、コミュニティ・スポーツへの参加が一つの契機となり、近隣交流を密にすると同時に他の社会的事業への積極的参加を促進・強化している」 [海老原・江橋 1981:50] と結論付けている。

しかし、これらの研究により行政の視点からコミュニティ・スポーツの価値が実証されているものの、参加者やコミュニティの成員の生活の内情やその価値は示されていない。

笹生はスポーツを通じたつながりをその内部の論理のみで読み解くのではなく、参加者たちの日常生活の連続性の中に見出し、その効果を考察している [笹生 2020:73-79]。笹生は本州とは全く違う楽しみ方をされるボウリング競技である沖縄のリーグボウリングに注目し、その本質が競技性ではなく人々が飲食をしながら会話を楽しみながら相互に関わり、つながりを持つことができる点にあることを明らかにしている [笹生 2020:73-79]。その中でも、リーグボウリング内でできたつながりからビジネスにまで発展した事例や仲間内の金銭の貸し借りである模合¹が行われている事例を紹介し、リーグ内で培われたつながりがボウリング場の外に広がって人々の日常生活に溶け込んでおり、単にスポーツの場として独立して存在していないと述べている [笹生, 2020:73-79]。

すなわち、スポーツには競技時間やその前後にあるコミュニケーションに一定の価値があり、そこで生まれたつながりが競技者の日常の営みに絡まっている。また、リーグボウリング場に一定の地域のコミュニティの成員が集まるわけではなく、集まったメンバーが「リーグボウラー」というコミュニティを形成する点で、コミュニティ・スポーツには行政が想定していたものとは異なる意味がある。

3. 小括

日本人は一定範域から構成される場を基盤として生まれた社会集団に属するが多く、集団内部でのみ作用する孤立的なタテ方向の関係性を構築し、結果、その連帯感とそれ以外の組織に対する差別意識を醸成しがちである [中根 1967:42-46]。したがって、親密ではないが自己と関連がある層ソトや、日常的に自己とは普段関連のない層ヨソの人間に対しては、親密な層ウチに対する態度に比して冷徹になりうる。つまり、強いウチ意識は、場集団が持つ孤立性や一体感から発生しているのである。

集団が場の性質や機能を有していても、その性質を決定づけるには注意が必要であると考えられる。横嶋は会社組織がアソシエーションからコミュニティへ変化していると指摘したように [横嶋 2018:8]、集団の機能が資格から場へと変化することもあり、単に集団の出自のみでその機能を資格と場に二分することはできない。日常のコミュニケーションや

ふるまい、話し相手への意識を捉えて集団の性質を決定づける必要がある。要するに、資格集団も場集団のような性質を持ちうる。

また、コミュニティ・スポーツ論によると、参加者はスポーツの競技性ではなく、その間と前後に発生するコミュニケーションを楽しむことに本質を見出しているとする主張がある[e.g. 笹生 2020]。そのようなコミュニケーションを通じて育まれたつながりは日常生活に溶け込み、競技を超えた関係性を生み出しており、スポーツにコミュニティの生成や強化に効力を持つ側面があることは確かである。そして、ウチ・ソト論との議論を踏まえると、リーグボウリングの事例は、「リーグボウリングをしたい、することができる」という特定の目的や資格を持っている人が集まっている点でアソシエーションや資格集団であると捉えられる。しかし、その中では模合という金銭の貸借など、人間的感情に比重があるやりとりが次第に生まれており、それはスポーツの価値を通じてコミュニティや場集団としての機能も有している。すなわち、スポーツやその場には日常生活にまで及ぶ仲間意識の醸成を促進する働きや、集団の機能を資格から場へと変化させる可能性を内包しているのである。

第3章 競技特性がつくる集団の性質

1. オリエンテーリングとは

日本オリエンテーリング協会が発行している競技規則²において、オリエンテーリングは以下の通り定義されている。

オリエンテーリングは、競技者（competitor）がテレイン（terrain）³の中を独力でナビゲーションして進むスポーツである。競技者は、地上に表示された多くのコントロール・ポイント（control points）を、地図とコンパスのみを使用して、可能な限り短時間で走破しなければならない。コースは、コントロールの設置位置について定義されるものであり、競技者がスタートするまで公開されない。

オリエンテーリングは、地図とコンパスを頼りに、図3のような地図上のポイントを順番に巡る速さを競う個人競技である。競技者は一人ずつ一定の間隔を置いて、スタートと一緒に地図を受け取り、出走する。地図はオリエンテーリングの地図規則に則って独自の図式で描かれており、等高線で与えられる地形の情報だけでなく、テレイン（競技エリア）内に存在する岩や藪、水系、様々なランクの道を記載している。競技者はコンパスで自身の進みたい方向とその情報を地図に描かれた情報と対応することで現在地を確定することが可能となる。速くポイントを巡るために、競技者はポイントを巡る最適なルートを検討し、ルートの辿り間違えなどのミスなくそれを行う必要がある。

日本オリエンテーリング協会に登録されている、競技を継続的に行う競技者の数は、2023年度の時点で2169名（男性1616名、女性553名）である。岐阜県恵那市にて開催された、日本で最も参加者数の多い大会である「2024年度全日本オリエンテーリング選手権大会ミドル・ロング部門」への参加者数は、1059人であった⁴。競技者登録をしている競技者のうち、およそ5割がひとつの大会に参加していることから、活動的な競技者が多いことが伺える。また、競技は性別・年齢別・技量別にクラスが分かれているため、初心者から熟練者まで同じ大会で競技をすることが可能であり、幅広い年齢層が楽しむことが可能である。実際、その参加者の年齢層は10歳から90歳までと幅広い。それが今年度で51回目の開催となることを加味すると、オリエンテーリングは長い期間に渡り、一定数の人々に親しまれてきたと考えられる。

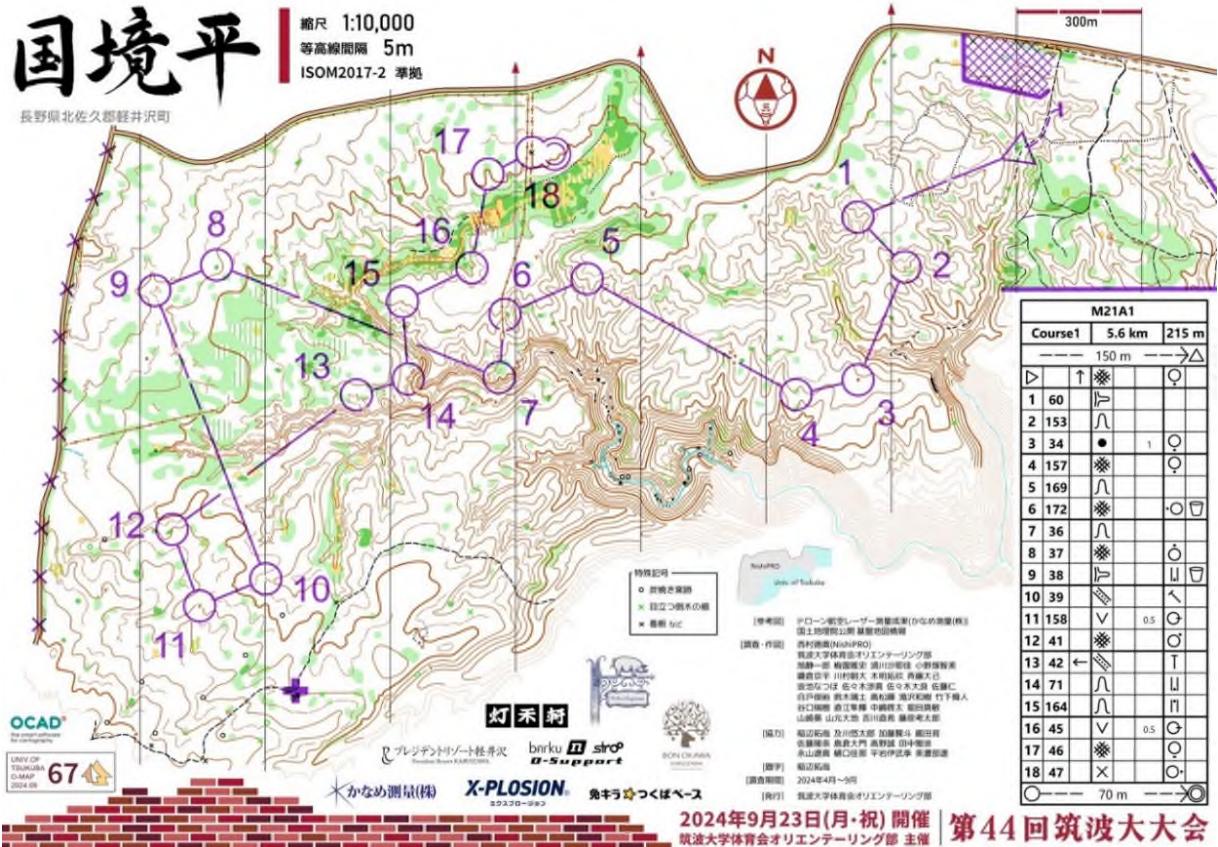


図 3 第44回筑波大会の地図（出典：筑波大体育会オリエンテーリング部）

2. 調査概要

筆者は2024年8月1日から9月30日の間、筑波大学体育会オリエンテーリング部が主催する「第44回筑波大会」の運営に参加し、本稿に係る現地調査を行った。本大会は筑波大学体育会オリエンテーリング部により2024年9月23日に長野県佐久平群軽井沢町にて開催された。参加者数は640名であり、その年齢層は15歳から70歳までであった。640名のうち、学生（中学生、高校生、大学生、大学院生）は252名（約39%）であった。本大会の準備期間では部員の活動を、大会当日は参加者のコミュニケーションを観察した。本章では、調査で判明したオリエンテーリング大会における競技特性を整理し、部員や参加者のウチ・ソト意識と集団の構成要因を分析する。

本大会を選定した理由を述べる。第一に、部と大会のどちらにも歴史と実績がある。対象とする団体は今年度で創部50周年を迎える。また、本大会は44回目の開催となり、参加者数も例年400名程度⁵である。以上から、本大会は伝統と歴史、実績があり、運営者と参加者がともに日本のオリエンテーリング競技界とかかわりを密接にもっていると考えた。第二に、運営者や参加者の競技歴が浅いことが挙げられる。本大会は運営者、参加者ともに大学から競技を始めた学生選手が多い。そのため、両者は競技歴の長い選手やクラブと比較して他スポーツとの違いを実感しやすく、インタビューしやす

いと考えた。以上の二点から、オリエンテーリングの競技特性と集団の構成要因の分析が可能であると判断し、本大会を事例として取り上げた。

3. 調査結果：オリエンテーリングの競技特性と文化

本項では、大会における参与観察と運営者と、競技者へのインタビュー調査をもとに競技特性を明らかにし、それから生まれている競技者のかかわりを整理する。

表1は筆者が第44回筑波大会でインタビューを行った人物のプロフィールである。木明と稻辺は運営者であり、その他の人物は会場でランダムに声をかけた競技者である。インタビュー調査では、できる限り回答者が自由に回答できるように半構造化の形式を取った。

表1 インタビュー回答者のプロフィール（筆者作成）

名前	年齢	属性	在住地	競技歴	大会練習会への参加頻度
木植	60代後半	社会人	茨城	45年	月に1回
田中	30代前半	社会人	神奈川県	15年	月に2~3回
橋	20代中盤	社会人	千葉県	7年	月に4回以上
楠	20代中盤	社会人	東京都	8年	月に2~3回
木明	20代前半	学生	茨城県	3年	月に4回以上
平出	20代前半	学生	宮城県	4年	月に2~3回
稻辺	20代前半	学生	茨城県	4年	月に4回以上

（1）「移動距離・時間の大きさ」が生むかかわり

オリエンテーリングの競技特性として、すべての競技者が挙げたのは、競技が生活圏から遠く離れたところで開催されることであった。競技は公共交通機関で通いにくく、車でしか行くことのできない山の中で行われることが多いため、自宅から会場までの移動距離や移動時間が非常に大きい。長野県で行われた「第44回筑波大会」では、東京都など関東を中心に、北海道、宮城、兵庫、京都など、国内各地からの参加者が確認できる⁶。宮城県から参加した平出は、「大会は基本的に長野や栃木、群馬付近で開催されることが多く、車での移動時間の長さや交通費の高さがネック」と話す。

こうした競技特性から「移動車内でかかわりをもつ・深める」ことが発生する。より詳しく述べると、競技者は車に相乗りし、競技だけでなく観光など様々な体験を共にし、コミュニケーションを重ね、親睦を深めている。ここで注目したいのは、同乗する人が車を出している人と同じ組織に所属しているとは限らないことである。田中は、「一人で移動していると交通費の負担が大きく、移動も単調でつまらない」と話す。そのため、所属している地域クラブ⁷内やSNSアプリで乗り合いの募集をかけることが多いという。所属している地域クラブのメンバーと乗ることもあれば、SNSアプリ経由で初対面の競技者と乗ることもあるという。したがって、初対面やかかわりが少ない場合でも、長い移動時間の中のコミュニケーション

ーションや現地での観光、食事をする中で、「同じ時間や体験を共にする中で親睦はすぐに深まる。

(2) 「個人でいる時間の長さ」が生むコミュニケーション

大会を観察していると、個人行動をしている競技者が多いことに気が付く。田中や木植は、「集団で移動していても、競技の特性上一人で過ごすことが多い」と話す。図5は大会の参加の流れを図式化したものである。



図4 大会参加の流れ（筆者作成）

オリエンテーリングのレースは、地図を見て考えて走るという競技性を担保するため、コースは同一であっても、競技者の出走時間は少なくとも一分間隔でランダムに割り振られる。具体的には、スタート時に同じコースの競技レベルが高い人を追いかけ、自身は何も考えずにコースを巡ってしまうというような事態を避け、競技者自身が考えながらルートを巡ることができるよう、一人一人にスタート時刻が設けられている。今大会では、出走時間は11時から13時17分まであり、競技の開始時間が選手により全く違うことがわかる。また、出走時間が遅い競技者が先に出走している選手の競技を見ることができないよう、公平性を担保するため、図3のような競技エリアと会場は隔離されており、会場と競技エリア間の移動には一定の距離（誘導区間）を有する。図4は「第44回筑波大会」で実際に使用された会場と競技エリア間の案内図であるが、二地点の移動時間は45分である。図2のコースでは優勝目安の記録が37分であった⁸ため、会場を往復する時間を加味すると、競技に関連した時間は少なくとも127分となる。つまり、一人一人の競技開始時間に幅があり、競技に関連してかかる時間も大きいという二点の理由から、個人行動をとらざるをえない時間が生まれる。田中は、そうした個人行動の時間の中でこそ、初対面の他者や普段会うことのない友人との交流が生まれる、と語る。そのような交流が生まれる機会が、図4のような会場と競技エリア間の移動時、会場や会場にあるキッチンカー周辺での待ち時間であるという。今大会では、会場と競技エリア間の道や、スタート周辺エリアにおいて、過半数の競技者が会話を交わしている様子が見て取れた。さらに、ゴール地点から会場間の道において

て、同じタイミングでゴールをした競技者同士が地図やコースについて議論している様子がうかがえ、その交流は会場とスタート間よりも活発であり、ほぼすべての競技者が交流をしていた。

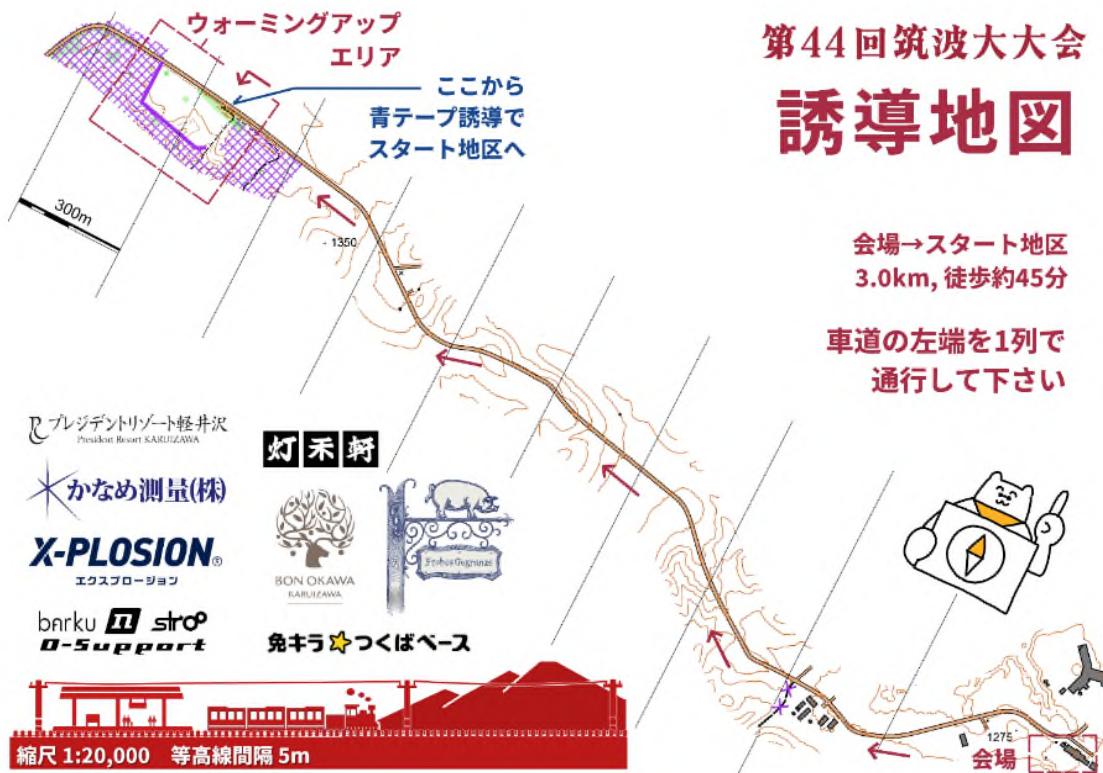


図 5 会場と競技エリア間の案内図（出典：筑波大学体育会オリエンテーリング部）

平出によると、競技者は会場においても活発に交流を行うという。オリエンテーリングの大会の会場にはしばしば運営者が招聘したキッチンカーが訪れており、会場の一部にキッチンカーが集まるスペースが存在すると話す。本大会では8店舗の出店があった。キッチンカーの調理の待ち時間や、その際に会場を移動するときに競技者は交流をしていた。また、会場では、写真1のようにゴールをした競技者たちは運営者が用意した拡大地図を中心に集まり、議論を交わしていた。平出は、一緒に来た友人といいことができなくとも、すぐ近くに競技の話をすることができる人がたくさんいる上、見知らぬ人でも競技について議論を交わすことは非常に楽しいと話す。また、競技者はどの大会の会場でもだいたい会うことができ、コースについて議論できるため、大会に行く際は競技者と会うことも楽しみなことのひとつであると語る。さらに木植は、一人で大会に来ても、何十年も大会に参加する中で仲良くなった多くの競技者と話すことで、すぐに時間が過ぎてしまい、時間がむしろ足りないと言ふ。



写真 1 競技後、拡大地図に集まり、議論を交わす競技者（筆者撮影）

（3）「地図解釈の多様さ」から生まれるコミュニケーション

第44回筑波大会の実行委員長である木明は、一つの大きな競技要素として「地図解釈の多様さ」があると話す。具体的には、地図では周るポイントが具体的に設定されているものの、ポイント間をつなぐルートは無数に存在しており、各競技者は経験や技術により一様に同じルートを辿らないと語る。

例えば、図5の地点7から地点8の間の場合、赤と青の二つのルートを検討することができる。赤の場合、実走距離が200m程度であるのに対し、登距離は10mである。そして、黒破線部の道を走行できる点で、ルートを辿る難易度が非常に低く、走りやすいという特徴を持つ。青の場合、実走距離は100m程度であるのに対し、登距離は20mである。そして、青ルートは赤ルートよりも辿ることが難しいものの、距離が短い。木明によると、この二例の場合、技術力が高くない、あるいは走力が高い選手は赤ルートを選択することがより良いという。

優勝目安のタイムが設定されていることからもわかるように、ポイント間を最速で移動しうるルートは存在する。そのため、競技者は初対面の人であっても多くの人々と議論を交わし、最速なルートを検討するのだという。楠と橘は、自分一人で見出したルートが正解とは限らないため、いろいろな人と話して自身のルートチョイスをする力を磨いていくことが何よりも楽しいという。木明自身もそれが最も大きな競技の楽しみといい、参加者に対して、普段よりその楽しみを実感してほしいという気持ちから拡大地図を用意したと語る。今大会のゴールと会場間の道で散見された競技者同士が地図をもって話し込んでいる様子や、

写真1で競技者が拡大地図にルートを書き込み、ベストルートについて検討している様子は、まさにそのような場面の現われであった。

つまり、地図解釈の多様さゆえ、地図・コースを媒介として積極的にコミュニケーションを取る文化があると伺える。競技者は、友人はもちろん、初対面の人であっても、地図・コースという「共通言語」をもつことでより親密かつ活発なコミュニケーションを取っている。



図6 ルート検討の例（出典：筑波大学体育会オリエンテーリング部）

（4）「競技の基盤となる地図」作成に伴い強まる一体感

木明は、参加者が地図に注目してコミュニケーションを取り、地図と現地を照らし合わせて競技を行うように、オリエンテーリングの競技の基本はすべて地図から始まるため、正確な地図作成が大会の開催には欠かせないと話す。今大会の作図、コース作成にあたり、ドローン調査、1次～3次調査、試走を含めて13日間を費やしている⁹。一般的な地図図式ではなく、世界基準のオリエンテーリングの地図図式に則って書くため、一からの調査と作図が必要であるという。また、あまりにも地図と現地の状況が異なってしまう場所が存在すると、大会の満足度が下がってしまうことはもちろん、本来の実力が記録に反映されないため競技不成立¹⁰となってしまう。そのため調査では何度も入念に地形や植生を確認し、正確な地図の作成を行うという。

調査・作図合宿は合計15日程度実施され、調査・作図、移動や寝食など、常に行動を共にするため、そのなかで組織内のつながりや一体感は非常に強まる。調査・作図に関してのコミュニケーションは、競技エリア内での調査時だけでなく、宿泊地における作図作業の際

にも行われる。今大会は調査・作図合宿のほとんどの日程において24時ごろまで地図についての議論が交わされていた。また、調査の開始時間は朝8時からであったため、活動している時間は常に行動を共にしている。

加えて注目したいのは、食事面である。木明によると、調査・作図合宿を伴う大会は経費が大きくなりがちであり、大会の会計を圧迫してしまうため、基本的にメンバーが持ち回りで買い出しと調理を行う。

また、調査・作図合宿以外にも、地図作成作業には時間が費やされる。木明は地図の色調や情報量など、競技者にとって読みやすい地図を作成する作業は大会直前まで行われるという。そして、その作業は部室や運営者の自宅を中心に長時間かけて行われるという。今大会の地図の最終調整や印刷には、1日12時間程度の作業を1週間続けて行っていた。

2023年度開催された第43回筑波大会の運営者であった稻辺は、「こうして仲間と同じ時間を共にした経験や、地図へのこだわりは非常に印象深く、大会運営を通して運営者との絆や関係は非常に深まった」と話す。また、1年以上たった今でも、運営者の中でその時のこと�이思い出としてしばしば語られるという。

以上のように、一つの大会を開催するにあたり、調査・作図に関する会話や私的な会話などの、単なる言語コミュニケーションだけでなく、一緒に調理を行うような共同活動、寝食を共にする共同生活のような非言語コミュニケーションがとられている。田中が「同じ時間や体験を共にする中で親睦はすぐに深まる」と述べていたように、長時間、長期間にわたるかかわりを通して、組織内的一体感は強まっている。



写真2 24時頃まで地図の精度に関して議論する運営者（筆者撮影）

(5) 「開催コストの大きさ」から生まれる組織間の繋がりと若手の活躍

大会開催に伴う金銭的・時間的コストは非常に大きい。2週間前後行われるような作図・調査合宿を始めとした地図作成コストが主に挙げられる。しかし、今大会の渉外責任者である直江によると、山林の関係者とのやりとりも最もコストがかかるもののひとつであるという。オリエンテーリング大会・練習会は自治体や国有林など、公共の土地で行われるものであるため、利用前に使用許諾を得るために活動である渉外が必要となる。渉外相手は山林を管理している自治体などに留まらず、山林に隣接している住民、大会の会場となりうる施設など、多岐にわたる。直江は、競技の認知度が低く関係者がその全貌を理解しにくいため、説明や挨拶周りなどに大きな時間コストを割かれると話す。また、複数回利用されているような競技エリアであれば、やり取りもスムーズであるが、初めて大会を開催するようなエリアには非常に苦労するという。実際、今大会の競技エリアは初めての開催であったため、メールのやり取りや関係者へのあいさつを含め、一ヶ月ほどかかったと語る。

以上のような渉外コストや地図作成コストにより、競技の開催にかかる労力は非常に大きい。そのため、各組織は大会開催日が重ならないように調整して開催されることが多い。また、そのコストの大きさゆえ、競技者は山で練習できる機会を非常に重要視しており、各組織は協力して練習会を開催し、練習会に招待しあうことがあるという。つまり、各組織は競技開催コストの高さを理由のひとつとしてつながりを持っている。

また、木明によると、同様の理由から大会や練習会を開催する際の運営者には若手を積極的に採用するという。その理由には、若手に経験をしてもらい、早くからその運営に慣れてもらうことで、同じ組織内でもコストを分散させることや、競技を運営者の立場として理解してもらうことがある。今大会では、競技資材を管理する資材責任者や、大会を盛り上げるための演出アイデアを実現させるための演出責任者に1年生を起用したという。木明は、オリエンテーリング競技を持続的に楽しみ、盛り上げていくためには、若手の育成が非常に重要であると語る。

表2 調査から判明した競技特性とかかわり（筆者作成）

競技特性	事例	生まれるかかわり	かかわりの範囲
移動距離 移動時間の 大きさ	<ul style="list-style-type: none">公共交通機関で行きにくい場所で大会や練習会が開催される自宅と会場間の移動距離、移動時間が大きい	<ul style="list-style-type: none">SNS アプリや地域クラブ内で車の乗りあいが募集される（初対面、関係が浅い人と乗り合うことも）乗り合った人と周辺地域を観光する	所属組織内 所属組織に囚われない個人

個人でいる時間の長さ	<ul style="list-style-type: none"> 競技者は運営者が指定した時間（1分間隔）にひとりずつ出走する 競技エリアと会場が離れているため、競技者は競技前後に両地点を移動する 会場に地元のキッチンカーが訪れる 出走時間は指定されているため、会場で時間を持て余す場合がある（団体で来ても、出走時間が分かれているため、一人の時間が生まれる） 	<ul style="list-style-type: none"> 半強制的に生まれた個人の時間に競技者間でコミュニケーションが生まれる 	所属組織に囚われない個人間
地図解釈の多様さ	<ul style="list-style-type: none"> 回るポイントが同じであっても、競技者は一様に同じルートを辿らない =一つのコースに対して多角的な視点が生まれる 	<ul style="list-style-type: none"> 地図（コース）を媒介としてコミュニケーションを取ることが多い =地図という「共通言語」を媒介として会話が生まれやすい 	所属組織に囚われない個人間
競技の基盤となる地図	<ul style="list-style-type: none"> 競技の成立には正確な地図の作成が必要 オリエンテーリング図式に則った地図を作成する 	<ul style="list-style-type: none"> 作図を行う「調査・作図合宿」など、地図作成に伴い組織のメンバーは常に行動を共にするため、組織内での一体感が強まる 	所属組織内
開催コストの大きさ	<ul style="list-style-type: none"> 山で練習会・大会を開催する必要があるが、地元民との渉外など、練習会・大会を開く労力が大きい 	<ul style="list-style-type: none"> 各組織が持ち回り、あるいは協力して練習会や大会を開催するため、組織間にコネクションが生まれる 若手でも大会や練習会の役職を担う 	所属組織内 組織間

筆者作成

4. オリエンテーリング競技者の集団構成要因

オリエンテーリング競技者の集団の性質を、所属組織内、所属組織に囚われない個人間、組織間の3つの分析を通して検討する。またここでは、集団の性質を「資格」、「場」、「資格が場に変化したもの」の3つに分類する。

ひとつの所属組織に注目すると、それは根本的に資格集団であるが、一定の時間や空間の共有により場集団として変化している。筑波大学体育会オリエンテーリング部の活動に注目すると、それはオリエンテーリングという共通の関心の追求のため成立している組織であり、「オリエンテーリングをすることができる」という後天的に能力を獲得する個人の集団であるため、資格集団として成立していることがわかる。また、資格集団の構成の特徴として、成員であれば新参者であっても他の成員と同列に立ち、成員個人の位置交代は可能[中根 1967:116-127]という特徴がある。大会運営に際し、競技歴に関わらず経験の浅い若手が積極的に登用されており、成員の位置は流動的に変化することからも、オリエンテーリング競技者の集団は資格集団である。しかしながら、その集団は同じ時間や空間を共有することで一体感を強め、場集団としての機能を有するようになっている。中根によれば、場集団はエモーショナルかつ全面的な個々人の集団参加を基盤として強調・強制されて集団の閉鎖性と孤立性を高め、構成者の距離を縮める[中根 1967:42-46]特徴をもつ。今大会行われた調査・作図合宿など長時間労力をかけ、様々なコミュニケーションを取り、組織として協力して共通の目的を達成するという過程は、運営者の全面的な参加と大会への熱量を通して踏まれるものである。また、稲辺が語ったように、そうした時間の共有から運営者は関係を深め、連帯感を強めている。以上のことから、運営者は場集団としての条件を有している。したがって、ひとつの組織に注目すると、資格集団として発足した場合であっても、オリエンテーリングの競技特性から発生する時間や空間の共有により一体感や親密性を高めており、結果として資格集団の機能を有しながらも場集団に変化している。

所属組織に囚われない個人間に注目すると、それは場集団の性質を持ちつつある資格集団である。ここでは、資格集団の特徴である、同類のよしみやリラックスした雰囲気、親しさなど、同類との世界で見せる階層的に同じ性質を持つ相手に対する仲間意識や親しさ[中根 1967:88-94]に注目する。今大会の参加者のコミュニケーションを捉えると、「オリエンテーリング競技者であるか」を重要視し、地図やルートに関して議論することに重きを置いており、年齢などの先天的要素は関与していないと考える。「大会会場に友人がいなくても競技の話をすることができる人はたくさんいる上、見知らぬ人でも競技について議論を交わすことは非常に楽しい」という平出の言葉や、写真1で多くの競技者が交流する様子、会場と競技エリア間で競技者が交流する様子は、まさに資格集団としての性質の現われであった。他方、個人としてのつながりも場集団としての性質を持ちつつある。確かに、今大会の会場では多くの競技者の交流が見られた。しかし、どの競技者も述べていた、「競技者はどの大会の会場でもだいたい会うことができ、コースについて議論できる

ため、大会に行く際は競技者と会うことも楽しみなことのひとつである」という言葉や、実際注目すると、大会への参加率が高い競技者は場集団としての性質を有している。要するに、オリエンテーリングは競技人口の少なさゆえ、大会に参加する人たちは、何度も大会の地図やコースについて議論を重ね、大会の中で時間と空間を共有する結果、馴染みの関係となり、連帯感を有している。したがって、所属組織に囚われない個人間に注目すると、基本的に資格集団としての機能を有するものの、大会参加とその中のコミュニケーションを通して連帯感を強化し、場集団としての機能を有するようになっている。

そして、組織間のつながりに注目すると、それは資格集団の性質を持っている。中根は、資格集団の特徴として、同質・同列である者を結ぶ「ヨコ」の関係で繋がれている[中根 1967:70-71]点がある。また、自分たちのような集団が社会にいくつもあり、それらと円滑な関係を保つことによって社会生活が円滑になるという、非排他的な見解と人間関係をもつ[中根 1967:46-52,64-67]点がある。各組織のつながりを見ると、大会や練習会の調整を中心にコミュニケーションを取っており、日本のオリエンテーリング界という大きな枠組みで捉えると、ヨコの関係を持っている。そして、各組織は競技をする上で、「自分たちが競技を続けられれば良い」という場集団がもつ自己完結的な見解を持っていない。むしろ、「他組織と協力して貴重な山で競技できる機会を共有しよう」という非排他的かつ協力的な見解を持っている。したがって、組織間のつながりに注目すると、競技の開催コストの大きさゆえにヨコの関係を有しており、資格集団としての性質をもっている。

以上の3点から、オリエンテーリング界の組織やつながりは図7のように、資格集団としての性質を有するものの、特有の一体感や連帯感など場集団としての性質も持つようになっていると考えられる。

[日本のオリエンテーリング界]

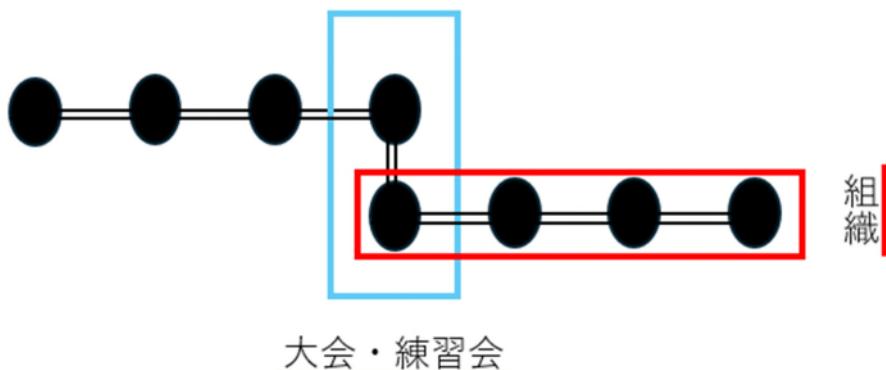


図7 資格集団と場集団のつながり（筆者作成）

競技者は、「オリエンテーリングの競技能力を身に着けたい」という共通目的のもと集団を形成し、競技界に属する。その組織内や組織間、個人間では、競技歴などの序列は重

視されず、競技者であるかどうかが注目される。このように資格集団の性質を持っている。しかし、競技特性から生まれるオリエンテーリングのかかわりの中、競技者は時間と空間を頻繁に共有し、コミュニケーションを取ることで一体感と連帯感を醸成し、場集団としての性質を持つようになっている。具体的に述べると、所属組織内では大会や練習会の開催に伴う準備期間や他県への長距離遠征を通して、個人は大会や練習会などにおけるコミュニケーションを通して馴染みの関係となり、一体感を醸成している。ただし、人間関係の構造に注目すると、それはタテの関係の性質を有しておらず、完全に場集団の性質を有していない。

したがって、オリエンテーリング競技界を社会構造の観点からみると、それは場集団の性質を一部有する資格集団、あるいはアソシエーションから派生したコミュニティであると言える。

5. 小括

大会への参与観察と、参加者へのインタビュー調査により、以下がオリエンテーリングの競技特性として挙げられる。それは「移動距離・移動時間の大きさ」「個人でいる時間の長さ」「地図解釈の多様さ」「競技の基盤となる地図を作成するコストの大きさ」の4点から生まれるかかわりと一体感・仲間意識、「開催コストの大きさ」から生まれる組織間のつながりと若手の活躍である。

これらの競技特性から生まれる競技者同士のかかわりに焦点を当てると、オリエンテーリング競技者の集団の性質は、「資格集団が場集団に変化した集団」である。

第4章 競技者のふるまいに影響を与える「ムラ」要素

1. 調査の概要

本研究では、2024年12月にオリエンテーリング競技者100名に対して「オリエンテーリング競技と他スポーツの競技におけるふるまいの違い」に関するアンケート調査を行った。また、アンケート対象者は学生に限定した。学生選手は競技歴が浅く、競技歴の長い選手と比較して他競技との競技性やふるまいの違いを実感しやすいと考えたためである。そして、回答した競技者の中2名にインタビュー調査を行った。2名を選定した理由は、3章で明らかにすることができなかった、競技者が認識している集団の構成要因や他者への振る舞いを決定づけている競技特性についてアンケート調査で回答していたためである。

アンケート調査では、オリエンテーリング競技者が経験したことある他スポーツとオリエンテーリングにおける競技者への振る舞いの違いや、競技者が感じる「ムラ」やウチの要素について、選択式と自由記述式を組み合わせる形で質問した（巻末資料参照）。特に「ムラ」、ウチ要素については自由記述式で質問を行い、自由に自身の経験や考えを語ってもらった。インタビュー調査では、アンケート調査の回答を基に、3章の大会への参与観察で検討できなかった、「ムラ」要素に関する質問を行った。

アンケート調査とインタビュー調査を組み合わせることで、オリエンテーリング競技者と他スポーツとの振る舞いの違いや「ムラ」要素を量的に把握するとともに、競技者個人の実体験や具体的な事例を質的に探り、オリエンテーリング競技者のウチ・ソト意識をより正確に浮かび上がらせることを目的とした。

以下ではアンケート調査とインタビュー調査の結果から、オリエンテーリング競技者と他スポーツ競技者の他者への振る舞いの違い、オリエンテーリング競技における「ムラ」要素について述べる。

2. オリエンテーリング競技者と他スポーツ競技者の他者へのふるまいの違いとその要因

（1）調査結果

オリエンテーリング競技以外で最も長く経験していた他競技を択一選択的方式で質問した。その結果、「陸上競技」（26名）が最も多く、次いで「サッカー」（11名）、「野球」（9名）であった。その他には、「卓球」（2名）、「合気道」（2名）、「剣道」（1名）など、14種の競技が挙げられた。また、他競技の経験がない人は7名であった。

次いで、オリエンテーリング競技者が初対面の人物に対してどのような振る舞いや会話をするのかを調べるために、質問を行った。

オリエンテーリング競技において、普段の大会や練習会ではどのような人と会話をするのかを複数選択方式で質問した。結果、「同じ大学の人」（100名）、「友人（他大学の友人、親密なOB/OGなど）」（86名）、「初対面の人」（93名）、「その他」（2名）であった（表3）。

その他の人の回答は、「キッチンカーの出店者」や、「通りすがりの人」であった。また、初対面の人の属性は、「同世代の競技者」(85名)、「大学(部)のOB/OG」(59名)、「OB/OG以外の年上の競技者」(56名)、「その他」(2名)の順に多かった(表4)。表3・4の質問から、オリエンテーリング競技者の9割以上が初対面の人と会話をしたことがあり、同世代の競技者を中心に、大学など共通項のない年上の競技者とも会話を交わしていることがわかる。

表3 オリエンテーリング競技者が会話をしたことがある相手(筆者作成)

同じ大学の人	100名
友人(他大学の友人、親密なOB/OGなど)	86名
初対面の人	93名
その他	2名

表4 オリエンテーリング競技中に会話をした初対面の人の詳細(筆者作成)

同年代(他大学の競技者など)	85名
大学(部)のOB/OG	59名
年上(OB/OG以外のかかわりのない競技者)	56名
その他	2名
話したことがない	7名

続いて、初対面の競技者との会話内容について複数選択式で質問したところ、「参加した大会やコースのことについて」(92名)、「共通の知り合い・競技者について」(61名)の回答が顕著であった(表5)。初対面の人と会話をしたことのある人が93名であるので、ほとんど全員が大会やコースについての話をしている。これは、前章で述べた「地図解釈の多様さ」が生むコミュニケーションである。橘と楠が述べていたように、多くの人がいろいろな人と地図やコースについて議論を交わすことで、自身の競技力を高めようとしている。「その他」には、「大学の専門や就職の話」や「普段の生活の話」があり、プライベートを話す競技者もいた。

表5 オリエンテーリング競技中に会話をした初対面の人との会話内容(筆者作成)

参加した大会やコースのことについて	92名
SNSでのことについて	10名
共通の知り合い・競技者について	61名
その他	4名
話したことがない	7名

オリエンテーリング競技者の初対面の競技者への対応の傾向を同年代と年上の二つに分けて択一選択式で質問したところ、どちらも半数以上の人気が他競技をしている時よりも親密であると回答した（図9）。「親密（他競技をしている時よりもかなり碎けて話す）」と「親密（他競技をしている時よりも碎けて話す）」の合計は、同年代に対しては64名、年上に対しては54名であった。他方、「やや冷淡（他競技をしている時よりもやや距離をおいて話す）」と「冷淡（他競技をする時よりも距離を置いて話す）」の合計は、同年代に対しては1名、年上に対しては2名であった。したがって、過半数の回答者がオリエンテーリングの競技者に対して親密さを感じており、その要因には、前章で分析した点とは別の競技性や競技者同士のかかわりが関与していると考えられる。

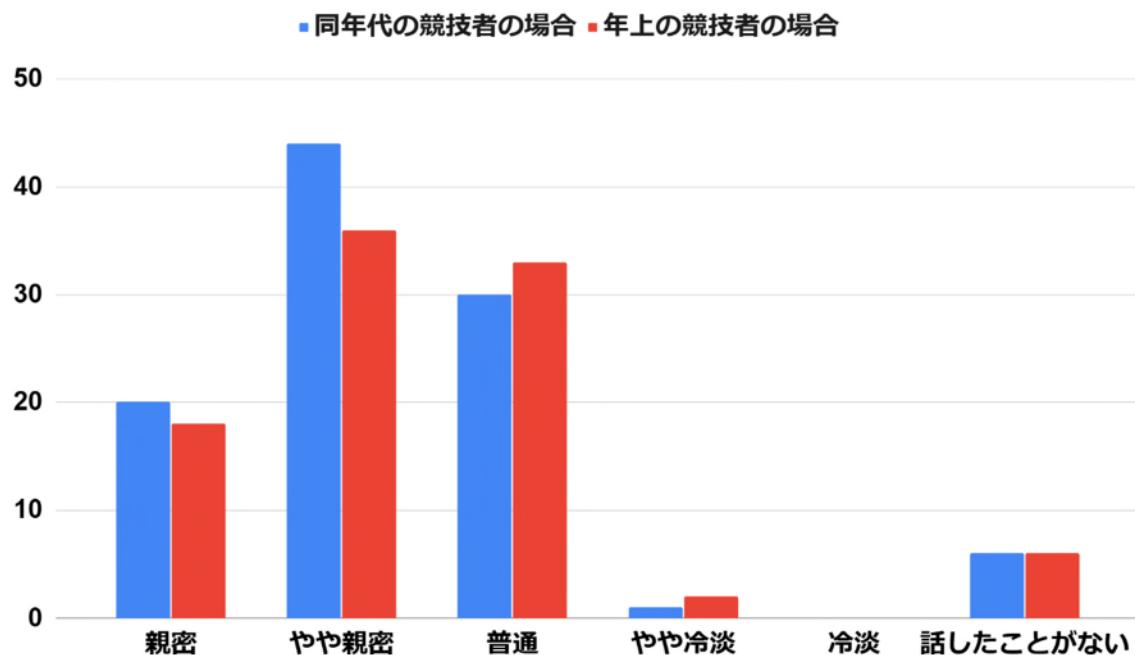


図8 初対面のオリエンテーリング競技者への対応の傾向（他競技における対応が基準）
(筆者作成)

初対面のオリエンテーリング競技者にとる会話姿勢について択一選択式で質問をすると、同年代に対して「もっと会話をしたい」が70名（初対面と会話をしたことがある人のうち約75%）、年上に対しては62名（初対面で会話をしたことがある人のうち約67%）であった（表6）。年齢層に関係なく、競技者の7割程度が初対面の競技者と会話をすることに対して積極的な姿勢を見ていた。また、年上の競技者より同年代の競技者に対して、「もっと会話をしたい」と思う人が約8ポイント高く、学生の競技者は同世代の競技者に対してより親密感を抱いていることがわかる。「その他」では、「他大学の様子を知りたい」「他大学の人と仲良くなりたい」という回答があった。

表 6 初対面のオリエンテリング競技者への会話への姿勢（筆者作成）

	同年代の競技者に対して	年上の競技者に対して
もっと会話をしてみたい	70名	62名
投げかけられた話題にのみ返答しよう	20名	31名
話してほしくない	0名	0名
その他	3名	0名
話したことがない	7名	7名

オリエンテリング競技の方が会話しやすい要因について質問をしたところ、「競技人口が少なく、なんとなく知っている」(71名)を最多として、「共通項の多さ（大学が一緒、共通の知人がいる、など）」(55名)、「誘導区間や大会・練習会で話しかける・話しかけられる」(53名)、「記録表やSNSで名前を見かける」(52名)がほぼ同数であった(表7)。競技人口の少なさゆえ競技者同士が相互に存在を認知している中、会場と競技エリアを繋ぐ誘導区間など、かかわりを生む競技特性が作用し、コミュニケーションの障壁が軽減されていると考えられる。「その他」には、「マイナースポーツということから来る、自分も含め世間から外れている者たちという安心感。いわゆる『村』感。閉じたコミュニティという安心感。」「レースのことなど話しやすい題材が多い。アスリートの面とオーガナイザーの面を持ち合わせることから、大会運営などでコミュニケーションを取ることがある」という回答があった。前者は、競技人口の少なさと、そこから生まれる共通の知人の多さなどは、共通点の多さゆえに生まれるものである。また、3章で「第44回筑波大会」が学生の競技者により開催されていたように、各競技者がプレイヤーであり、大会を主催し競技者を楽しませるオーガナイザーである。後者は、競技者はその点で二つの視点から大会を分析でき、会話の種を持つことができるという意味である。「

他方、「他競技の方が会話しやすい」と回答した人は1名であった。回答者は2点の理由を述べている。1点目は、陸上競技にも個人の時間があり、そちらの方が会話に発展しやすいことである。陸上競技では、競技者がひとつのレースを通して相手と駆け引きを行い、その中で親近感を覚え、レース後には互いに感想を語り合うことがあるという。さらに、レース後の会話をきっかけに、以後の大会で会話をするようになり、親睦が深まることがある。2点目は、陸上競技でもオリエンテリング同様に、記録会や練習会、大会といった競技者の集まりが頻繁にあることである。春夏秋季には、県内の競技者が集う記録会や大会が開催され、冬季には合同練習会が開催される。陸上競技では、競技者の走力に合わせて出走する組が決定されるという競技特性から、走力が同じ程度の競技者は毎競技会で同じレースを走る。したがって、以上の2点の理由から、陸上競技の同じ程度の走力を持つ競技者においては、頻繁にある競技会のレースで体験を共有する中で互いに親しみを覚え、レースの感想

を語り合う中で関係性を築くことができる点で、オリエンテーリングよりも会話をしやすいと考えられる。

表 7 オリエンテーリング競技の方が会話しやすい要因（筆者作成）

大会や練習会の頻度が多い	44名
誘導区間や大会・練習会で話しかける・話しかけられる	53名
記録表やSNSで名前を見かける	52名
共通項の多さ（大学が一緒、共通の知人がいる、など）	55名
競技人口が少なく、なんとなく知っている	71名
相手が気さくに話しかけてくる	19名
他競技の方が会話しやすい	1名
その他	13名

初対面の競技者に対して望むつきあい方を択一選択式で質問したところ、同年代とは部分的なつきあいを望む人が多く、年上とは形式的なつきあいをとる人が多かった（図9、10）。同年代の競技者に対して71名、年上の競技者に対しては36名が「気軽に（積極的に）会話をする、ご飯に行く（部分的つきあい）」を望んでいた。他方、同年代の競技者に対しては23名、年上の競技者に対しては59名が「時々会話や挨拶をする（形式的つきあい）」を望んでいた。一方、同年代に対しても年上に対しても、「なにかにつけ相談し、助け合う（全面的つきあい）」関係を望む人は5名以下であった。図9を確認すると、部分的つきあいにあたる「ご飯や遊びに出かける」「SNSでつながる」「大会や練習会に参加したら自ら話しかけに行く」の合計は、同年代の競技者に対しては56名であったが、年上の競技者に対しては29名であった。また、形式的つきあいにあたる「大会や練習会で話しかけられたら会話をする」「大会や練習会ですれ違ったら会釈をする」の合計は、同年代の競技者に対しては30名であったが、年上の競技者に対しては55名であった。したがって、同世代の競技者に対しては3割程度が形式的つきあいを望む一方、全体の傾向としては部分的つきあいを望んでいることがわかる。同様に、年上の競技者に対しては3割程度が部分的つきあいを望む一方、全体の傾向としては形式的つきあいを望んでいることがわかる。これらは、NHKが2018年に16歳以上の国民を対象に実施した同質問への回答と比較すると、オリエンテーリング競技者の初対面の競技者に対するつながり意識は低い。しかし、同じ組織の競技者に対しての質問と比較をすると、それと比較してもつながりへの意識は高い。具体的には、全面的つきあいにおける回答率は、同調査が約34%であるのに対し、同じ組織の競技者に対しては65%であった。また、部分的つきあいにおいて、同調査は約46%であり、それは34%であった。したがって、同じ組織のメンバーに対しては全面的つきあいを望む人が多い。

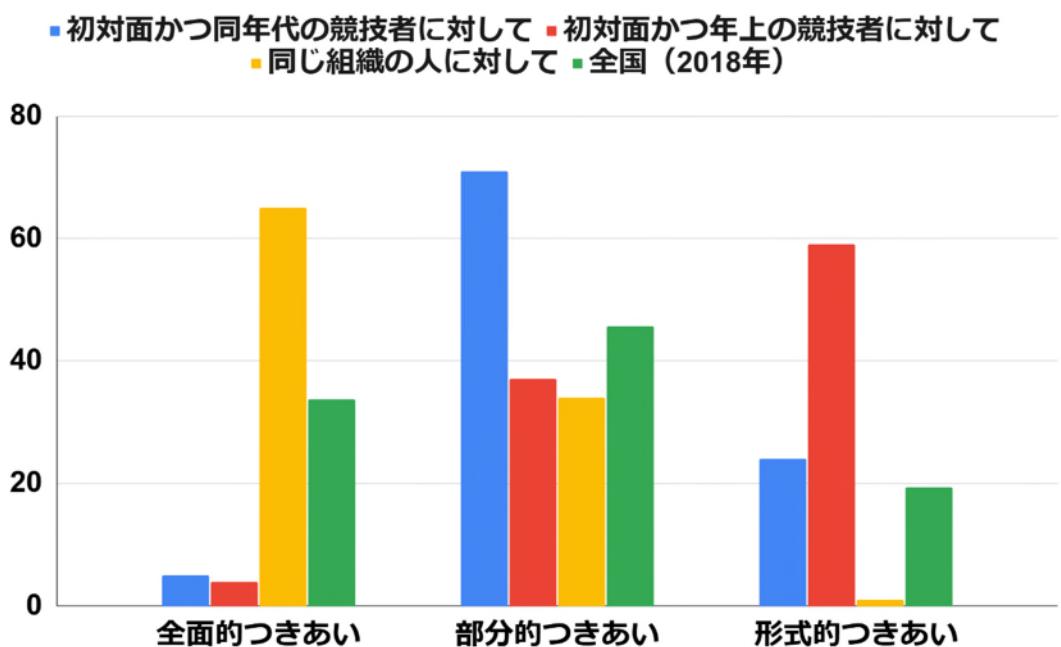


図 10 初対面のオリエンテーリング競技者とつながりを持った経験の程度（筆者作成）

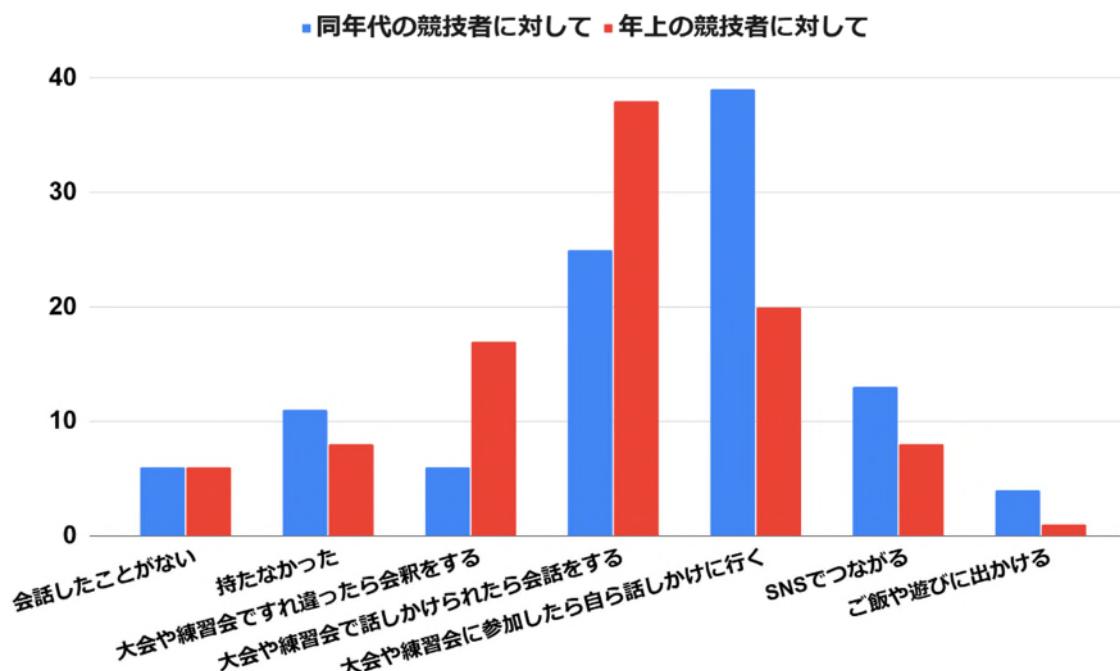


図 9 初対面のオリエンテーリング競技者との望ましい付き合い方（筆者作成）

（2）オリエンテーリングと他競技におけるウチ・ソト・ヨソ意識

オリエンテーリング競技者のヨソとソトの境界意識は柔軟性を持つ。オリエンテーリング競技者は普段自己とはかわりのない層（ヨソ）に対して親密なコミュニケーションを取

る傾向にあり（図8）、かかわり方に差はあったとしても、かかわりを持ち続け（図10）、自己と関連のある層（ソト）へと引き込んでいる。三宅が述べたように、それは境界意識の柔軟性ゆえに起こることである。そして、その要因には、オリエンテーリング競技者全体の集団特性が資格であることがある。資格集団は、同類のよしみやリラックスした雰囲気、親しさなど、同類との世界で見せる階層的に同じ性質を持つ相手に対する仲間意識や親しさを持つ[中根 1967:88-94]。大会会場にて、地図やコースを媒介物として初対面の者同士でコミュニケーションを交わし、歓談している様子は、まさに資格集団としての仲間意識ゆえに起こることである。そのような意識や、誘導区間など初対面の個人が接触するような環境条件を構成する競技特性により、競技者はヨソの人物をソトに引き込むようなコミュニケーションを取っている。

他方で、オリエンテーリング競技者のウチとソトの意識の境界は、一般的な日本人と同様に一線を画している。同じ組織内の人間は全面的な付き合いを望まれ、初対面の競技者は部分的かつ気軽な付き合いを望まれている点で、前者は親密な層ウチに属し、後者は自己と関連がある層ソトに属する（図10）。図9に注目すると、初対面の競技者とつながりを持った経験の中で、「SNSでつながる」「ご飯や遊びに出かける」ような、大会以外でのつながりを持つような競技者の合計は、同年代とは17名、年上とは9名である。つまり、ソトの層からウチの層にまでかかわり意識が変化した競技者は、多くとも同年代の競技者で17名、年上の競技者で9名である。したがって、ウチ・ソト意識は一線を画している。ウチ・ソト意識を隔てている要因は、ウチの層に所属している人物や組織が場集団としての性質を強く持っている点である。同じ組織内の人間は、調査・作図合宿などに始まり、練習や大会遠征を通して普段から空間や体験を共有し、一体感や連帯感を強めており、場集団としての性質を強く持っている。一方、確かに大会や練習会で交流する競技者間においても大会に参加する中で場集団の性質を持っているが、同じ組織内の人とは共有する場が少ないため、場集団としての要素は薄い。つまり、大会や練習会の開催頻度は多くとも週に1回程度であり、共有する時間や体験も限られているため、同じ組織内ほどの一体感や連帯感は醸成されにくい。

また、逆説的に競技者の日常生活の内情という観点から見ると、大会や練習会で交流した競技者同士のつながりは日常生活のつながりにまで発展しておらず、ウチ層ほどの親密なかかわりを持ち、場集団のような連帯感を強く持たないことは明らかである。笛生はリーグボウリングを事例として、その本質が競技性ではなく、それを通した日常生活にまで及ぶかかわりの発展であることを明らかにした。オリエンテーリング競技者間のつながりは大会会場にのみ留まる傾向にあり（図9）、会話内容もほとんど大会や競技コースについてであった（表5）。したがって、オリエンテーリング競技者は競技性に本質を見出しており、大会会場でつながること自体に価値を見出しているわけではない。その結果、会場で交流する競技者間には、所属組織を同じくするものとの関係ほど連帯感が生まれていない。

したがって、オリエンテーリング競技者のウチ・ソト・ヨソ意識を整理し、他競技と比較

すると、図11のようになる。

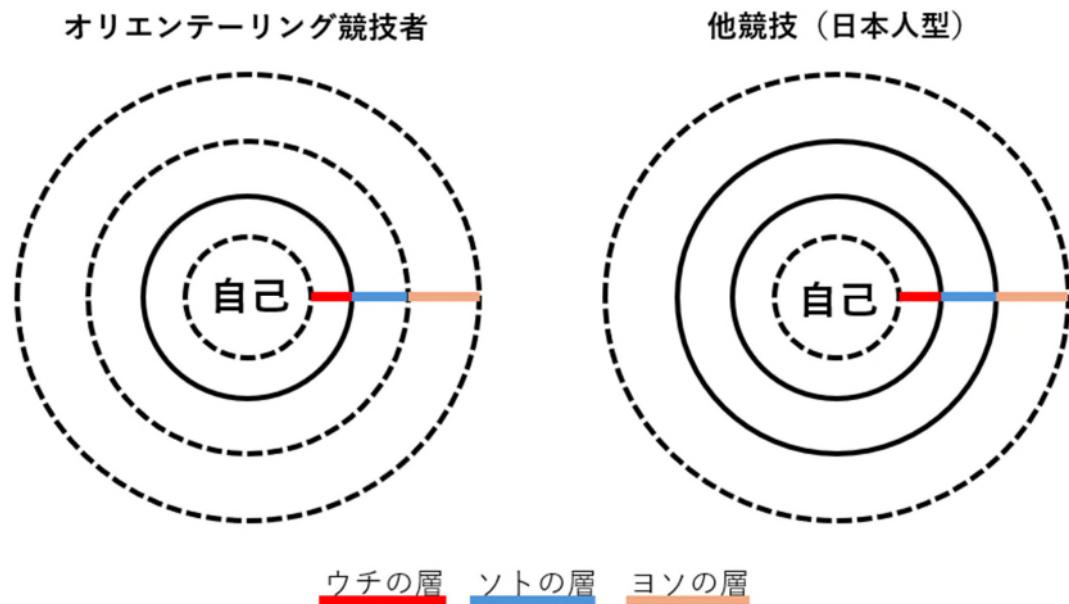


図 11 競技者同士のウチ・ソト・ヨソ意識の比較（筆者作成）

オリエンテーリング競技者と他競技の競技者のこうしたウチ・ソト・ヨソ意識の違いを生む要因は、所属組織外の競技者の親密さ・コミュニケーションの取りやすさにある。さらに、その基盤には、物を媒介とした話題の豊富さ、オリエンテーリング界への帰属意識の強さ、競技人口の少なさゆえの共通項の多さがある。

物を媒介とした話題の豊富さは、地図が解釈に富んでいる点と、モノを反省材料にする点で、特異である。前者は「地図の解釈の多様性」という競技性の通り、地図やコースのルートチョイスについて他者との議論を通して自身の競技力を向上させることができ、その醍醐味となっているということである。後者は、他競技が実践を主に競技力を高める傾向がある一方で、オリエンテーリング競技者は地図という物を介した思考訓練を通して競技力を高めているという意味である。すなわち、他競技の競技者が反省を行う際、主に実践を通してプレーを修正する必要がある一方、オリエンテーリング競技者は思考実験のため地図・コースを基に議論をする必要がある。実際、表7の「オリエンテーリングの方が会話しやすい要因はなにか」という質問の「その他」には、「レースの反省という話題がある」「走るコースが同じで、反省をすることから会話が自然と始まる」「地図・コースという、対戦相手ではなく一つの共通目的に向かって会話をする」「森の中では観戦ができないため、自分や他者のプレーを会話でしか伝えることができない」という回答があった。以上のように、地図という物が存在することで、競技者同士のコミュニケーションは活性化されている。

オリエンテーリング界への帰属意識の強さは、その構成員全員が競技者であり、練習会や

大会の開催者であるという二面性を持つことに由来する。他の競技では、大会の開催者と競技者は住み分けられており、学生の競技者を含むすべての構成者が全年代向けの大会の運営を行うことはない。例えば、筑波大学の学生クラブである筑波大学蹴球部に注目をする。本部は、筑波大体育会オリエンテーリング部と同じ体育会系の部活動に分類される。本部は、競技面だけでなく社会貢献活動面においても実績を挙げており、地元の企業にスポンサーとして支援されるほど、活動が活発な団体である。競技の運営という観点に着目すると、本部は普及活動を行い、近隣の小学生を対象とした練習会を開催している¹¹。他方、筑波大学体育会オリエンテーリング部が開催した「第44回筑波大会」では、15歳から70歳までの幅広い年代の競技者を対象とした大会を開催している。つまり、学生など競技歴の浅い競技者でさえも、調査・作図合宿など多くのコストをかけて幅広い年代の競技者が楽しめるような競技を考案するため、競技と向き合う経験を持っている。実際、表7の「オリエンテーリングの方が会話しやすい要因はなにか」という質問の「その他」において、「各競技者がプレイヤーであり、大会を主催し競技者を楽しませるオーガナイザーである」「オリエンテーリングというサービスの運営者(サービス提供者)と参加者(サービス消費者)が同じであるため、同じオリエンテーリングというサービスを提供したり消費したりする者であるという仲間意識がある」という回答があった。以上のように、オリエンテーリング競技者は、競技の参加者であるだけでなく、運営者としてオリエンテーリング競技と向き合った経験から、その帰属意識を強めている。その結果、競技だけでなく、競技者に対しても親近感を持つ。

競技人口の少なさゆえの共通点の多さとは、競技者の所属クラブの種類の少なさから生まれる。例えば、大学クラブにのみ注目すると、「2024年度全日本学生オリエンテーリング選手権大会」の参加大学数は40校である¹²。その中でも、普段の練習では各校の競技者が集まって練習を行うクラブもある。関東圏の大学9校が普段から集まって練習をしている「OLK」¹³を始めとしたインターナショナルクラブが各地に存在している。したがって、実際にひとつの集団としての総数は40校に満たない。そのため、学生から競技を始めたオリエンテーリング競技者は、出身クラブや大学が固定化され、必然的に共通点が生まれる。その結果、話題が生まれやすく、競技者は初対面の競技者に対しても親近感を持っている。

3. オリエンテーリング競技者が認識する「ムラ」要素

(1) 調査結果

オリエンテーリング競技の組織内で一体感を覚えた経験とその具体例について複数選択式で質問をすると、71名が「遠征の頻度が多い」、69名が「遠征に伴う移動時間が長い」の回答が顕著であった(表8)。特に「遠征の頻度が多い」という回答の差は顕著であり、他競技の回答数は4名であった。「その他」の回答には、「大会を全員で開催すること」「頻繁に大会・練習会でほかの人と会うこと」「インカレなどの大きな大会への参加や学生大会の開催など、共同体の繋がりを確認したり、強化したりする大会(ムラ社会では祭とでもいう

べきか)があること」「部外のメンバーとも大会運営の経験を通して同じものを共に作ること」という回答があった。他競技の組織内についての同様の質問では、67名が「練習の頻度が多い」と回答し、最多であった。「その他」の回答には、「そもそもチームスポーツで連携が欠かせないし、普段から試合でうまく連携できるように議論をしていること」「大会の応援を一定時間続けること」があった。両回答を比較すると、オリエンテーリング競技では遠征の多さやそこで共有する時間、他競技では練習の多さの中で一体感を認識している。

表 8 組織内で一体感を覚えた要因（筆者作成）

	オリエンテーリング	他競技
遠征の頻度が多い	71名	4名
遠征に伴う移動時間が長い	69名	2名
部室がたまり場となっている	34名	22名
練習の頻度が多い	20名	67名
家が近い	15名	8名
全体のイベントが多い	24名	6名
そう感じたことはない	5名	27名
その他	14名	13名
他競技の経験がない		7名

オリエンテーリングが「ムラ」と言わされることについて、そのように感じたことがあるかと、その理由について自由回答式に質問を行った（表9・10）。79名の回答があり、うち68名が「ある」、5名が「ない」、5名が「両方感じる」、1名が「わからない」であった。

「ムラ」と感じたことがある理由には、これまで明らかにしてきた「地図解釈の多様性から生まれるコミュニケーション」「競技人口の少なさゆえの顔見知りの多さ」「噂話の広まりの速さ」など、集団のつながりの強さを示す事例が28件挙げられた。また、「競技界外とのつながりを持たない」「初心者の加入ハードルが高い」といった閉鎖性の高さを示す事例が19件挙げられた。他には「地図版権者の権力の強さ」が3件挙げられた。表9では、アンケート回答のうち、競技者が認識している「ムラ」要素についての回答のうち、これまで明らかにされていなかったものを中心に抜粋している。

表 9 オリエンテーリング競技界を「ムラ」と感じた理由（筆者作成）

あ る	参加者が必ず見るラップセンター（WEB記録表）に競技者の名前がレースの結果と共に掲載されているため、より身近に感じられる
	身内と外に境界があり、閉鎖性がある。オリエンテーリングという競技の特異性が高いため、他の人たちから認知されにくい。競技者が比較的少ないため、競技者の新陳代謝が(他の有名競技と比べて)少ない。これらの特徴から、オリエンテーリン

	<p>グ競技内の結びつきがとことん強化、固定される一方、オリエンテーリング以外の競技者などとの間に大きな壁が生じてしまっている傾向にある。</p>
	<p>競技できる年齢の幅が大きく、人の入れ替わりが少なく、内内のグループが大きくなっていくことが多い</p>
	<p>オリエンテーリングは全体的に「ムラ」らしいと感じることが多く、その要因の一つとしては「観戦者」、「競技者」、「運営者」の境界が曖昧であることが挙げられる。多くのメジャースポーツ（野球やサッカーなど）は、大規模なスタジアムや限られたフィールドで競技が行われるため、観戦が容易であり、純粋な「観戦者」の層が多い。これらの「観戦者」は必ずしも「競技者」である必要がなく、スポーツ用具の購入や競技経験なしに、テレビやインターネットを通じて低成本に試合を楽しむことが可能である、いわゆる「ライト層」である。この結果として、メジャースポーツは、「競技者」や「運営者」だけでなく、「観戦者」という広い裾野を起点とした関わり方によって、「開放性」が強くなるように思える。また、大会は大規模かつ組織化されており、現役の「競技者」または「観戦者」が大会の「運営者」になることは比較的少ない。そのため、「観戦者」「競技者」「運営者」の繋がりがオリエンテーリングと比較して薄いという特徴がある。これに対しオリエンテーリングは競技エリアが広大であり、ルート選択が自由な特性上、観戦が難しい印象がある。（近年はカメラの設置やGPSの利用が進んでいる）また、伝統的に草の根での大会開催がなされていることから、純粋な「観戦者」というより「競技者」と「運営者」を兼ねた関わり方が一般的であり、観戦のみを行うような「ライト層」が生まれにくく土壌がある。「ライト層」が少ないがために、スポーツとしては「閉じた」形になりやすい。大会の運営を通じて運営内で関わりを持ち、「競技者」と「運営者」とのかかわりや、その関係性の逆転がたびたび起こる。その結果として一人一人が競技や運営への造形が深くなり、オリエンテーリングへの熱意や競技者同士の絆が深まりやすい。これらが小規模で密接した「ムラ」的なコミュニティを形成しやすい要因になりうる。</p>
	<p>大学オリエンテーリングを中心に文化が形成されていて、その文化を知らない人（社会人から始めたい人）は界隈内に入りづらい空気がある。</p> <p>オリエンテーリング界隈内の小組織（地域クラブや大学クラブ）がムラ社会らしいとはそこまで思わない。オリエンテーリングの界隈自体がムラ社会らしいとは思う。</p>
	<p>基本的には同じ所属の人たちで集まり、所属内の身内意識、身内ノリが強くあるようを感じられるときがある。</p>
	<p>各競技者の所属、出身大学や所属クラブなどバックグラウンドがすぐに分かる 大学生の競技者の活動が最もアクティブであり、学生時代に始めた人以外は競技を始めにくいという閉鎖性がある</p>

	運営者と競技者が同じ(ほぼ誰もが一度は大会を運営している)
	オリエンテーリング団体に所属するほぼすべての競技者は、運営も競技もある程度行っており、オリエンテーリングというサービスの運営者(サービス提供者)と参加者(サービス消費者)が同じであるため、運営「寄り」/競技「寄り」というスタンスの差異はあれど、同じ「オリエンテーリングというサービスを提供したり消費したりする者」である。両者の「オリエンテーリングというサービスを提供したり消費したりする者」という性質の共通項が、「共同体意識」を強めている。
	外部の噂話が耳に入る
	話が広まりやすい

「ムラ」と感じたことがない理由には、「若手の活躍」が3件、「初対面の競技者とのつながりが広がりやすい」など所属外のつながりの開放性を示すものが5件挙げられた。表10は、「ムラ」と感じない理由の回答の抜粋である。

表10 オリエンテーリング競技界を「ムラ」と感じない理由（筆者作成）

な い	年配の人の力が集中していると言うよりも、献身的に若手をサポートしている競技・運営は比較的若手が取り組んでいる
	全国の同期や同じ都道府県の学生などと横のつながりがある
	積極的なクラブ勧誘があることや、複数のクラブに所属している人がいること、大会会場や練習会で年齢・所属関係なく話したりすることなどから開放性を感じる
	大会会場や誘導で初対面の人とも会話をし、そこからつながりを持つ

(2) オリエンテーリング競技界の「ムラ」意識を醸成する要因

「ムラ」意識を説明する要素の一つとして、一体感や連帯感の強さが挙げられる。本節ではそれに注目して、「ムラ」意識を醸成する要因を分析する。

表8によると、オリエンテーリング競技者が一体感を覚えた要因には、「非日常的な体験の共有」がある。競技特性として郊外の山地で競技が開催されるため、それに伴う長時間の車移動や寝食など、普段の生活では体験しえないほど長時間行動を共にする。他方、他競技においては、「日常的な体験の共有」がある。普段の練習がオリエンテーリングより高頻度で開催されており、接触の回数が多くから一体感や仲間意識を強めている。したがって、他競技とオリエンテーリング競技の一体感、ひいては「ムラ」意識を醸成する要因の大きな違いは、共有する時間・体験の非日常性にある。

アンケート調査の結果、オリエンテーリング競技者の約86%（68名/79名）が競技界隈をムラらしく感じている。回答の中でも、「ムラ」らしさ、つまり閉鎖性や競技者同士の一体感を感じる要因として、「『ライト層』がいないこと」「大学クラブに所属していないと、競技に参入しにくい閉鎖性があること」の二点を新たな競技特性として注目する。さらに、

回答者の二名にインタビュー調査を行った。回答者の詳細は表 11 の通りである。

表 11 インタビュー回答者の詳細（筆者作成）

名前	年齢	競技歴	始めたきっかけ	競技頻度
押田	20 代前半	半年	地域クラブの HP を閲覧し、メールを通して加入	1 月に 2~3 回
平岩	20 代前半	6 年	大学クラブの勧誘を受け、加入	1 か月に 4 回以上

押田は、「大学クラブに所属をしていないと、競技に参入しにくい」と話す。オリエンテーリングクラブを持つ大学は数少ないため、クラブを持たない大学の出身かつ競技者とながりを持たない人は競技に参入しづらい。押田は、SNS アプリで配信されているオリエンテーリングの競技動画を閲覧し興味を持ち、競技を始めようと思ったという。しかし、彼女は競技を体験する手立てが実際に大会に行くことしかないにもかかわらず、競技者とのつながりを持たないため、大会への参加方法や競技方法がわからず、悩んだ。さらに、地域クラブの存在を知り、直接加入した後は、地域クラブのほぼすべての競技者が大学クラブ出身であることを知り、オリエンテーリング競技界への限定的な参入手段を再認識した。地域クラブは専用のウェブページを持っていることは稀である。そのため、オリエンテーリング未経験者がオリエンテーリング競技者と接触することは容易ではない。加えて、押田が入会した京葉 OLC のウェブページは地域クラブに所属していないオリエンテーリング競技者向けのものであったため、連絡することにためらいを覚えたという。しかし、練習や食事会に参加してみると、どの競技者も押田に親しく話しかけ、競技について指導をしてくれるため、すぐにクラブになじむことができたと語る。

以上のことから、学生以外の競技を始めようとする人に対して公開されている情報が少ない上、競技界への参入方法は基本的に大学クラブを通してであり、非競技者と関係性を築くための橋渡し実体として存在していない。いわば、人のコネクションが参入の基本的条件となっているということである。そのことが新規参入の障壁となり、競技界内の閉鎖性を生み出している。

平岩は、「気軽に観戦を楽しめる人『ライト層』がいない一方、競技者は運営活動を通して競技への造詣を深め、競技者同士のかかわりを強めているため、他競技と比べて閉鎖性が浮き彫りになっている」と話す。他競技では、テレビなどで放映され、試合場所が整備され、競技エリアが動かずとも観戦できるなど、気軽に観戦できるものが多い。そのため、競技を知らない人や観戦をする人だけでも競技を楽しむことが可能である。つまり、参入障壁は低く、当該競技界に内外の隔たりはない。他方、オリエンテーリングは郊外の山地で行われ、

誘導区間が存在し、一定の範域で競技が行われるため定位置の観戦ができないなど、全体を観戦することは難しい。加えて、競技を知り、大会の詳細を知り、足を運ぶ手立てがわかりづらい。したがって、競技界の内外には大きな隔たりが存在している。

ライト層という受け皿がないことは、参加者の年齢に合わせたコースが用意される競技特性や競技者が運営者を兼ねる競技特性により、オリエンテーリング競技界を一層「ムラ」にしている。他競技には、高年齢層を対象とする大会が少ないため、競技者から引退した場合、運営者となるか、観戦者などのライト層となり、競技者の層は分散する。しかし、オリエンテーリングの大会では、幅広い年齢層に合わせてコースが用意されており、高年代の競技者は、運営者としてだけでなく競技者として競技を楽しむことが可能となり、競技者層に留まる。また、競技界への参入障壁は高いため、新たな競技者の流入は少ない。したがって、競技歴が長い競技者は競技界内に滞留するが、新参者が少ないと、競技者間の仲間意識やウチ意識をより強めている。

オリエンテーリング競技界を「ムラ」と感じていない人は約14%（10名/70名）であった。回答者は、「若手の活躍」「競技者間のヨコのつながりの強さ」「個人の時間が生むコミュニケーション」という競技特性から、競技界内では「ムラ」らしさを認識していない。回答の中では、資格集団の構造的特徴であるヨコの関係を示すオリエンテーリング競技界独特の言葉が見られた。オリエンテーリング競技者は「全国同期」という、大学の入学年度が同じ全国各地の競技者がつながりを持っている。各年150名程度いると言い、競技人口が少ないのでこそできるつながりでもある。平岩によると、この関係をきっかけに初対面の競技者と話すことがあり、競技者同士のつながりを強めているという。

以上のことから、オリエンテーリング競技界と他競技界の構造は図12のようになっている。

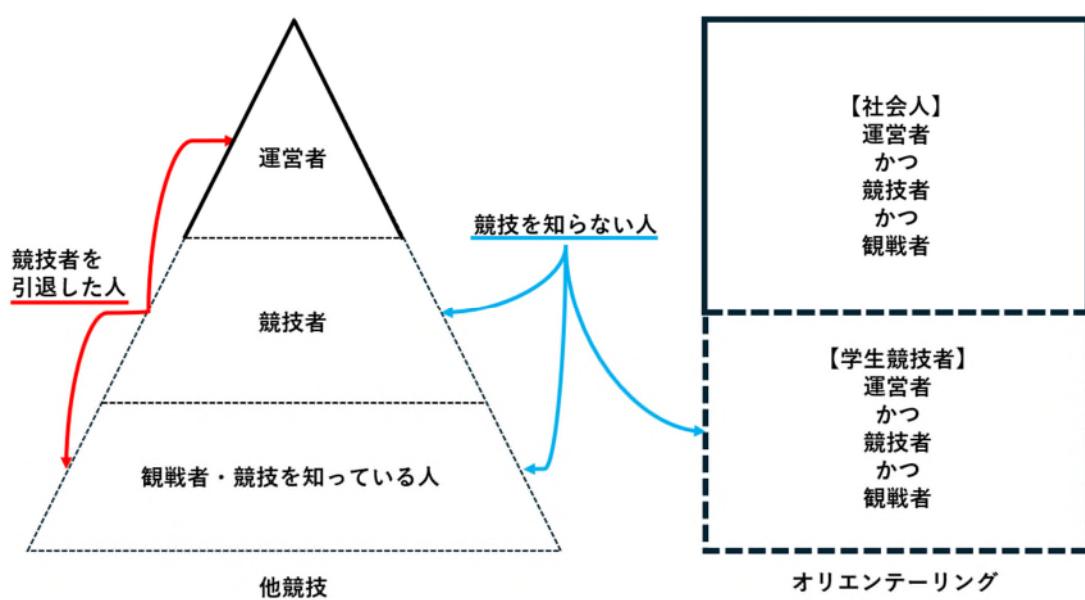


図12 オリエンテーリングと他競技の構造（筆者作成）

競技者は日常的な競技活動から、「『ライト層』がいないこと」「大学生時代にオリエンテーリングを経験しないと、競技に参入しにくいこと」を原因として、競技界に「ムラ」らしさ、つまり競技者内での閉鎖性や一体感を感じている。他方、初心者など新参者が活動的である点や競技者間のヨコのつながりが開放的である点においては、「ムラ」らしさを感じていない。要するに、競技者同士で連帯感や閉鎖性を認識すると同時に、競技者はオリエンテーリング競技者と、それ以外の競技者との間で隔たりを認識しており、その結果、競技界全体を「ムラ」と認識しているのである。

4. 小括

オリエンテーリング競技者が感じている「ムラ」らしさは、他競技とのかかわりという大きな枠組みで捉えたとき、競技界の孤立性や閉鎖性に起因している。しかし、同時に、競技界内の競技者同士のつながりはヨコの関係の構造であり、開放的なつながりを持つため、「ムラ」らしくないと認識している。

物を媒介とした話題の豊富さ、オリエンテーリング界への帰属意識の強さ、競技人口の少なさゆえの共通項の多さを理由として、競技者は競技界内の初対面の他者とコミュニケーションを活発にとり、親密なふるまいを見せる。つまり、ヨソの人間をソトに引き込むコミュニケーションを取るような柔軟なかかわり意識を持つ。したがって、競技界内においては「ムラ」要素である閉鎖性を認識していない。また、そのようなコミュニケーションから生まれるつながりの多くは、大会内部でのみ完結する部分的つきあいであり、笛生が明らかにしたスポーツを通じて育まれた模合のような日常的なつながりは存在していない。このような点でも、「ムラ」意識の一因である一体感や連帯感は釀成されておらず、競技界は「ムラ」と認識されていない。

他方、参入障壁が高いという競技特性を原因として、競技者は競技界外の他者に親密なコミュニケーションを取っていない。玉瀬らの定義に従い、ある集団から隔絶された層のことをムエンに置かれる人とすると、オリエンテーリング競技者は、競技を知らない人に対して、ムエンからヨソへ引き込むコミュニケーションを取っていない。すなわち、オリエンテーリング競技集団は、非競技者に対してのかかわり意識が薄い自己完結的かつ閉鎖的な集団となっている。こうした競技界の閉鎖性やマイノリティとしての仲間意識を認識した結果、競技者は競技界外に対する隔たりと競技界内の「ムラ」らしさを感じている。

第5章 オリエンテーリング競技者が認識する「ムラ」の起源

1. オリエンテーリング競技者が認識する「ムラ」

オリエンテーリング競技者が認識している「ムラ」らしさの大きな要因はオリエンテーリング競技界の一体感の強さと孤立性にある。より具体的には、会話をしたことがない競技者同士が親密さや一体感を持っていること、他競技から物理面・情報面で孤立をしていることである。他競技と経験を比較する中で、より競技者同士の結束が強い一方で、競技への参入者が少なく、孤立感を覚えることに対して、「ムラ」という語句を用いていると考えられる。両者のような環境はオリエンテーリング競技が持つ競技特性により形成されている。

オリエンテーリング界の一体感を醸成する原因は二つある。一つは、競技者を繋ぐコミュニケーションの種や競技者同士の接続チャネルの多さである。例えば、競技特性により生まれた個人の時間や、参加した大会についての反省を議論する時間、限定的な所属組織により生まれる人間関係の共通項の多さ、遠征・大会の頻度の多さがある。さらに、オリエンテーリングという同じサービスを享受し、提供するものという、競技者・運営者としての経験から生まれる仲間意識も事例として挙げられる。こうした競技特性により、競技者は会話をしたことがない競技者に対しても、「なんとなく知っている」と親密感を覚え、競技者同士の一体感を強めている。もう一つは、競技歴が長い競技者が競技集団に残りし続けることである。他競技では、競技者を引退した競技者は、ライト層や運営者層に取り込まれ、一つの層にはとどまらない。しかし、オリエンテーリングにおいては、年齢に合わせたコース組みがなされ、ライト層が存在しないため、競技者はその集団に滞留する。したがって、競技歴を重ねた競技者の人数が、他の層に分散せずに年々増加し、かかりを深める中で、より強固な一体感が育まれる。

オリエンテーリング界の孤立性を強めている要因は、その参入ハードルの高さである。そしてその理由は二つある。一つは、ライト層が包括されていないことである。他競技においては「観戦者」といった気軽に競技を楽しむことができる人が存在し、伴って、競技を知らない人でも簡単に競技を知り、体験することができる構造になっている。他方、オリエンテーリングは、郊外の山地で競技が開催されるという競技特性から、観戦を通して気軽に競技を体験することができない。すなわち、体験をするには実際に競技をするほかなく、時間的にも金銭的にもコストが大きく、参入ハードルが高い。したがって、ライト層が存在することができないため、競技界の孤立性は高まっている。もう一つは、非競技者に対する、競技者の呼び込みへの姿勢である。押田の事例から、競技者は非競技者に対しての受け入れ姿勢は非常に親密と考えられる。しかし、競技を知るまでの段階において

情報は公開されておらず、公開されていたとしても、競技界内向けの情報であり、得られる情報は少ない。したがって、学生以外では競技界への加入手段は基本的にコネに限られる。このように、非競技者に露出する情報の少なさゆえ競技界の孤立性は高まっている。

2. オリエンテーリング競技と他競技のウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識の違い

図11では、オリエンテーリング競技者と他の競技者のウチ・ソト・ヨソ意識について明らかにした。これに加えて、第5章3節において説明された両者の大きな違いである「ライト層」の存在の有無など競技への参入ハードルの高さを加味し、ムエン層の概念を取り入れると、ウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識は図13、14のようになる。組織のメンバーは、オリエンテーリング競技においては全面的つきあいが望まれており（図9）、場集団のような親密さを持つことから、ウチの層に分類される。また、オリエンテーリング競技において、会場で会話をする競技者は、親しみを持つ（図8）一方で、実際には部分的つきあいを持つ（図9）ことから、ソトの層に分類される。そして、オリエンテーリングと他競技どちらにおいても、普段かかわりを持たない競技者はヨソの層に分類される。

両図の違いは二点ある。一点目は第4章で述べた通り、ソトとヨソ間の境界である。二点目はヨソとムエン間の境界である。他の競技では、観戦するだけの者など幅広く競技を楽しむ層が存在し、競技を知らないムエンの層の人でさえも気軽に情報を入手し、経験をすることができる。他方、オリエンテーリングでは、大会会場が郊外の山地など遠征が必要な点で物理的な障壁が存在する上、直接競技者とかかわりがないと大会に参加すらできないという情報の障壁も存在し、気軽に競技について知り、経験することはできない。加えて、オリエンテーリング競技にはライト層が存在せず、競技者間には一体感や連帯感、まとまりがあるため、非競技者はより競技者との隔たりを感じる。したがって、ムエンとソトの層は、他競技では柔軟であり、オリエンテーリングでは一線を画している。

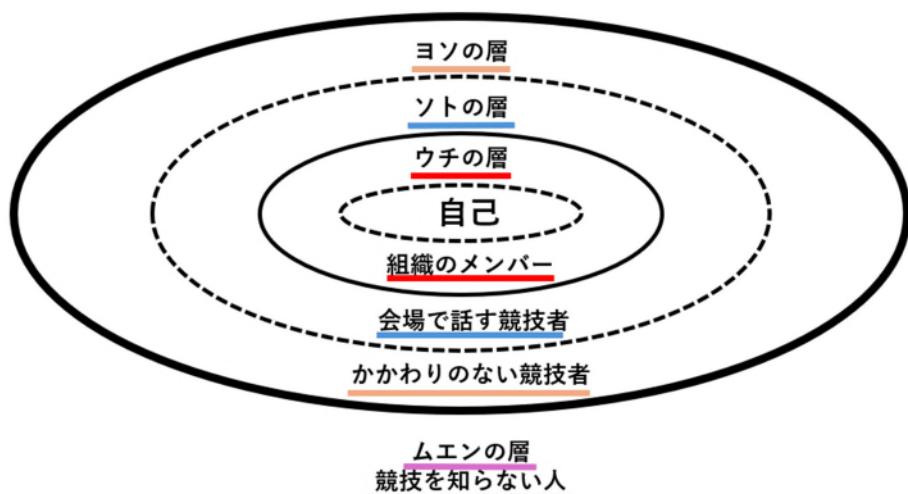


図 13 オリエンテーリング競技者のウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識（筆者作成）

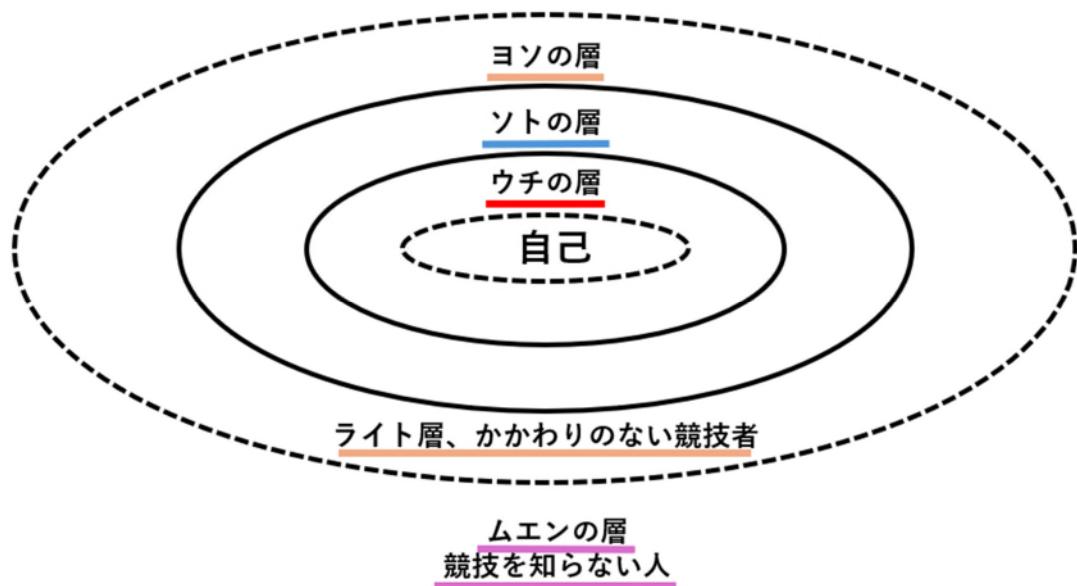


図 14 他の競技者のウチ・ソト・ヨソ・ムエン意識（筆者作成）

そして、ヨソ・ムエン意識の境界の柔軟性の違いは、コミュニケーションの範囲を制限しており、オリエンテーリング競技者に「ムラ」らしさを認識させる一因となっている。例えば、コミュニケーションを取る範囲に注目すると、他競技では基本的にソトの層までの広がりを持つものの、それはヨソの層やムエンの層まで広がる可能性を秘めており、開放性を有している。他方、オリエンテーリング競技など物理的な閉鎖性を有する競技においては、ヨソの層とムエンの層が隔絶しているため、そのコミュニケーションやかかわりは限定的かつ閉鎖的である。したがって、オリエンテーリング競技者のうち他競技を経験している人は、普段のコミュニケーションやかかわり意識の範域においても閉鎖性を感じ、「ムラ」らしさを認識している。

3. 場の範囲により変化するかかわり意識

本稿では、オリエンテーリング競技の独自の競技特性により、競技者間のかかわり意識が強くなり、一般的な日本人型（図1）のかかわり意識とは異なり、いわゆる欧米人型のかかわり意識となっていることを示した（図11）。オリエンテーリング競技者が過去に経験をしていた他競技と比較をすると、かかわり意識を変化させている要因には、閉鎖性や外部との隔絶がある。そして、閉鎖性ゆえ、内部の者に対しての心理的距離を縮め、親密感を持ち、その間でのかかわり意識は柔軟になっている。また、同じ体験を頻繁に共有することが、それを促進している。

しかし、閉鎖性や高頻度な体験の共有という二つの要素は、場集団の要素である。場を強調する一般的な日本の社会集団は、いわゆる日本人型のかかわり意識を持つ。他方で、オリエンテーリング競技者は、場集団でありながらも、いわゆる欧米人型のかかわり意識を持っている理由は何であろうか。それは、場の範囲の違いにある。オリエンテーリング競技は、

先述した二つの要素から、構成者に対して親近感を持ち、競技界全体に対して場集団の意識を持っている。他競技は初対面の競技者に対してオリエンテーリング競技者ほど親密感を抱いていない（図8）ことから、競技界全体に対して、場集団の意識を持っていない。ウチ・ソト・ヨソ・ムエンの層の図に沿って説明をすると、オリエンテーリング競技者はヨソの層までを場と認識している一方で、他競技者はソトの層までを場と認識している。すなわち、広範囲を場と認識しているオリエンテーリング競技集団においては、ヨソの層からソトの層に引き込む、いわゆる欧米人のようなコミュニケーションやかかわり意識が存在している。

以上から、ライト層を包括しない閉鎖性や、競技者同士の高頻度な体験の共有という場集団の要素を持つ集団は、通常の場集団よりも広範囲を場と認識し、その結果いわゆる欧米人のようなかかわり意識を持ちうる。

第6章 結論

本稿では、オリエンテーリング競技界がなぜ「ムラ」らしいと認識されるのか、その意味を、社会構造と言語行動の観点を用いたウチ・ソト論を中心に、競技者の実体と、そこから浮かぶ競技特性に焦点を当てて論じてきた。

ウチ・ソト論の社会構造の観点からの研究において、集団の構成要因は資格と場の二種に分かれ、それぞれヨコの関係やタテの関係を構造としてもつと中根は述べた。本稿は、ヨコの関係がもつ同じ資格集団の中で共有される仲間意識や、タテの関係がもつ人間的感情に比重を置く連帯感に注目した。言語行動の観点からの研究においては、自己対社会の価値観を親密度で分類し、国別にその特徴が述べられている。本稿では、三宅と玉瀬、馬場のウチ・ソト意識についての解釈を融合し、かかわり意識を「ウチ・ソト・ヨソ・ムエノ」の4つの層に分類した。また、ウチ・ソト論のみでなく、スポーツがコミュニティ形成の有効な手段であるとするコミュニティ・スポーツ論にも注目した。 笹生は、沖縄のリーグボウリングに注目し、その本質が競技性ではなく、競技のさなかに起こる人々のかかわりや、それが日常生活の営みにまで発展していることであると述べた。これらの理論を踏まえると、スポーツやその場には、日常生活にまで及ぶ仲間意識の醸成を促進する働きや、集団の機能を資格から場へと変化させる可能性を内包している。したがって、スポーツの中でもオリエンテーリングは、競技特性によりその働きが強く、「ムラ」と認識されていると考えることができる。

第3章では、ウチ・ソト論のうち、社会構造や集団の構成要因についての理論に着目し、競技者同士のかかわりが生まれている大会に焦点を当て、参加者や運営者など競技者がコミュニケーションを取るきっかけとなっている競技特性について分析した。その結果、「移動距離・移動時間の大きさ」「個人でいる時間の長さ」「地図解釈の多様さ」「競技の基盤となる地図を作成するコストの大きさ」の4点から生まれるかかわりと一体感、「開催コストの大きさ」から生まれる組織間のつながりと若手の活躍がオリエンテーリングの競技特性として挙げられた。これらの競技特性や、競技者の内情を通して、集団の性質を分析すると、オリエンテーリング界の組織やつながりは資格集団としての性質を有するものの、特有の一体感や連帯感を強めており、場集団としての性質を持つようになっている。

第4章の前半では、ウチ・ソト論のうち、言語行動の観点からの研究に着目し、参加者同士のコミュニケーション内容や、初対面の競技者に対してのふるまいに焦点を当て、オリエンテーリングと他競技におけるかかわり意識の差異について分析した。その結果、「物を媒介とした話題の豊富さ」「オリエンテーリング界への帰属意識の強さ」「競技人口の少なさゆえの共通項の多さ」を要因として、オリエンテーリング競技者は所属組織外の競技者に対して、親密さ・コミュニケーションの取りやすさを感じていた。したがって、

オリエンテーリング競技者は他の競技者と比較して、ソト・ヨソの層の境界線が柔軟である。

第4章の後半では、競技者がどのような場面で「ムラ」を感じるかに焦点を当て、その中でも競技者と競技の孤立性に焦点を当て、分析をした。その結果、オリエンテーリング競技では、観戦者などの「ライト層」が競技に包括されない一方、競技者は競技界内に滞留し続け、連帯感を強めているため、孤立性が高まっていた。

これらの分析から、オリエンテーリング競技者が認識している「ムラ」らしさの大きな要因は、その競技界の一体感・仲間意識や孤立性にあると考察できる。すなわち、競技者同士で連帯感や閉鎖性を認識すると同時に、オリエンテーリング競技者はそれ以外の競技者との間で隔たりを認識しており、競技界全体を「ムラ」と認識している。また、かかわり意識である「ウチ・ソト・ヨソ・ムエン」意識のなかでも、ソト・ヨソと、ヨソ・ムエンの境界において、オリエンテーリング競技者と他の競技者には差異があると考察した。ソト・ヨソの境界の違いは先述した理由で、オリエンテーリング競技者のそれは柔軟性を持つ。他方、ヨソ・ムエンの境界においては、オリエンテーリングがライト層を包括しないように、オリエンテーリング競技者のそれらは一線を画している。

以上の二点を踏まえると、他競技を経験している人にとって、以下の理由で「ムラ」らしさを感じていると考察できる。他競技では、コミュニケーションを取る範囲ソトの層までに留まっているが、それはヨソの層やムエンの層まで広がる可能性を秘めており、開放性を有している。他方、オリエンテーリング競技においては、コミュニケーションを取る範囲はヨソの層までと、通常他競技よりその範囲は大きいが、ヨソの層とムエンの層が隔絶している点で、そのコミュニケーションやかかわりは限定的かつ閉鎖的である。したがって、他競技を経験している人にとって、オリエンテーリング競技の閉鎖性や孤立性は浮き彫りになり、「ムラ」らしさを感じられる要因となっている。そして、オリエンテーリング競技界など、集団全体に対して「ムラ」らしさを認識される集団は、通常の場集団よりも広範囲を場と認識しているため、欧米人的なかかわり意識を持ちうる。

まとめると、オリエンテーリング競技者が認識している「ムラ」らしさは、競技者同士の連帯感の強さと、非競技者からの孤立性に起因している。そして、このような特性を持つ集団は、いわゆる欧米人的なかかわり意識を持ちうる。タイトルにもした「ムラ的コミュニケーションの起源」や、序章で述べた「オリエンテーリング競技者のウチ・ソト意識の境界線の柔軟性を生み出す環境的要因」も、この二点に集約されている。

本稿では、大会でのインタビュー調査を除き、学生選手を対象としてアンケート、インタビュー調査を行った。有効回答数は100件程度であり、分析と考察は学生視点で行っている。したがって、これらの特性は学生の競技者に限ったものであり、一概に競技者全般に適応できない。学生選手に留まらず、年配の競技者に対しても調査を行い、競技特性を検討するべきであろう。また、その特性は学生選手のすべてに当てはまるわけではない。アンケート調査は、大会におけるインタビュー調査を基に組まれた選択式を中心としたも

のであったため、回答を制限してしまっている上、各競技者の属性などの実体を掴むことができていない。したがって、本稿の研究をさらに進めるためには、量的調査と質的調査を併用してより多くの競技者に行なうことが必要である。より多くの競技者に量的調査を行うことで全体像を把握し、質的調査により一人一人の意識やかかわりをミクロな視点から描き出すというアプローチを積み重ねることで、オリエンテーリング競技者が「ムラ」と感じている実態を明らかにできるだろう。本稿では、量的調査と質的調査を併用して行ったが、サンプル数が少なく、回答の半数が一つの大学からであり、データに偏りが見られた。競技特性のひとつとして地域性が存在するため、本稿の内容がどこまで一般化できるかに関しては、さらにデータを集めたうえで検討をするべきである。それでも、本研究では量的・質的なアプローチからオリエンテーリングと他競技を比較して、オリエンテーリングというスポーツを通して、ウチ・ソト意識が変化しうることを示した点で一定の意義がある。

今後の展望としては、社会人や高齢者など、さらには競技を離脱した人々など対象者を広げたうえで、さらに個人の語りを集める質的調査を行い、研究を行うことが求められる。

注

¹ 模合について 笹生は次のように述べている。

模合とは、他地域では無尽講や頼母子講と呼ばれる金銭の貸し借りのことである。例えば、10名で模合を行い、各人が毎月1万円ずつ持ち寄るとする。その場合、プールされた10万円を毎月異なる1名が受け取っていき、10ヶ月で1周することとなる。模合参加者は、毎月少額の金銭を支払う代わりに、一度にまとまった金銭を得ることができるるのである。元々沖縄で金融機関の発展が遅れたことから生まれた制度であるが、これによってまとまった金額が必要な際に高利貸しを頼る必要がなくなるなど、現在も人々の生活を支える制度である[笹生, 2020:79]。

² 日本オリエンテーリング協会「日本オリエンテーリング競技規則」(2024/12/11 参照)

https://www.orienteering.or.jp/archive/rule/rule_competition_20240211.pdf

³ “terrain”は、「地域・地形」と訳されるが、オリエンテーリング競技者の中では、山野や公園などの競技エリアを指す。

⁴ 日本で開催されるオリエンテーリング大会のうち、最も参加者数が多い大会のひとつ。筆者の経験では例年参加者数は1000人程度であり、継続的にオリエンテーリングをしている人は同様に1000人程度であると考えられる。

Japan-O-entrY“第51回全日本オリエンテーリング選手権大会ミドル・ロングディスタンス競技部門”(2024/11/11 参照)

<https://japan-o-entry.com/event/view/1521>

⁵⁵ 42回筑波大会の参加者数は425名、43回筑波大会の総参加者数は538名であった。

Japan-O-entrY“第42回筑波大会”(2024/12/3 参照)

<https://japan-o-entry.com/event/view/1134>

Japan-O-entrY“第43回筑波大会”(2024/12/3 参照)

<https://japan-o-entry.com/event/view/1324>

⁶ Japan-O-entrY“第44回筑波大会”(2024/12/3 参照)

https://japan-o-entry.com/event/view/1515/show_detail#entrylist

⁷ 地域クラブは、ある地域にゆかりを持つ競技者集団で構成されるオリエンテーリングクラブである。学生から社会人まで年齢を問わない特定の地域のメンバーで構成されてい

る。しかし、地域クラブのひとつである京葉オリエンテリングクラブの会員によると、出身が千葉であるが現住所は他県に置くようなメンバーも増えており、地域という枠組みはそこまで強くないという。地域クラブの活動には、定期的な大会を開催や、その地域を拠点としたランニング、飲み会などのイベントがある。

KEIYO ORIENTEERING CLUB ホームページより（2024/12/6 参照）

<https://www.keiyo-orienteering.com/>

⁸ オリエンテリング競技では、運営者が最速ルートや競技者のレベルを考慮し、コースの優勝目安となるタイムを設定する。第44回筑波大会では37分であった。

Japan-O-entrY“第43回筑波大会”（2024/12/6 参照）

<https://japan-o-entry.com/event/getfile/7162>

⁹ 第44回筑波大学オリエンテリング大会報告書より

<https://drive.google.com/file/d/1EaJIBhDAg8bz04W7z8jILaC3BRgSIv06/view>

¹⁰ オリエンテリング大会では、日本オリエンテリング協会が定める競技規則に対しての違反行為や、予測不能な事態など、競技者に対して不公正な事態が時に発生する。その場合、競技者から運営者に対して、それらの不備を調査し競技の公平性について証明するように求める「調査依頼」が提出される。それが受理され、不公正と認められた場合、参加者の記録は非公式なものとして保存される。

日本オリエンテリング協会「日本オリエンテリング競技規則」（2024/12/11 参照）

https://www.orienteering.or.jp/archive/rule/rule_competition_20240211.pdf

¹¹ 筑波大学蹴球部 HP 「普及活動」（2024/12/8 参照）

<https://www.tsukubashukyu.com/index/mpage/id/220>

¹² 2024年度日本学生選手権大会 スタートリストより

https://drive.google.com/file/d/1iV1wGjJyoA4mA3-1sHxO9m_yTEiY_JWu/view

¹³ 東大OLK HP より（2024/12/8 参照）

<https://olk.jp/wp/p/>

参照文献

- R.M.MacIver. (1917). Community. Macmillan and co.
- R.M.MacIver. (1921). The Elements of Social Science. Palala Press.
- R.M.MacIver. (1950). Society. Macmillan and co.
- WellmanBarry. (1979). The community Question:The Intimate Networks of East Yorkers.
American Journal of Sociology84, 1201-1231.
- 伊藤恵造・松村和則. (2009). コミュニティ・スポーツ論の再構成. 体育学研究 54, 77-81.
- 井上忠司. (1977). 「世間体」の構造—社会心理史への試みー. 講談社.
- 海老原修・江橋慎四郎. (1981). コミュニティ・スポーツの社会的機能について—コミニ
ティ形成に果たす役割の検討ー. レクリエーション研究 8, 41-50.
- 経済企画庁. (1973). コミュニティ・スポーツの社会的機能について—コミニティ形成に
果たす役割の検討ー. 59-60.
- 笹生心太. (2020). スポーツを通じた人々のつながりの形成に関する事例研究—沖縄のリー
グボウリングに着目してー. スポーツ社会学研究 28-2, 73-81.
- 玉瀬耕治・馬場弘美. (2003). アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究. 教育実
践総合センター研究紀要 12, 43-50.
- 中根千枝. (1967). タテ社会の人間関係. 講談社.
- 日本放送協会. (2018). 第 10 回「日本人の意識」調査 (2018) . 日本放送協会.
- 平林周祐・浜由美子. (1988). 外国人のための日本語例文・問題シリーズ 10 敬語. 荒竹出
版.
- 三宅和子. (1994). 日本人の言語行動パターン ーウチ・ソト・ヨソ意識ー. 筑波大学留学生
センター日本語教育論集, 29-39.
- 横嶋勝仁. (2018). 社会目標としてのコミュニティとアソシエーションー人との繋がりで助
け合う地域社会組織の考察のための先行研究・概念のレビュー. Policy Studies
Review No.45, 3-21.
- 米山俊直. (1976). 日本人の仲間意識. 講談社.

参考資料

2 セクション中 1 個目のセクション

卒業論文のためのアンケート調査

筑波大学 4 年の竹下舜人です。

卒業論文にて、オリエンテーリング競技と他のスポーツ競技における「初対面の人に対してのコミュニケーションとふるまいの差異」について研究しています。
オリエンテーリング競技と、これまでのスポーツ経験を照らし合わせて、その違いについて回答をお願い申し上げます。

基本的に選択式ですので、回答時間の目安は 5 分程度となっています。
尚、今回ご回答いただきました内容に関しては、卒業論文でのみ使用し、それ以外の目的では一切使用することはありません。また、回答内容を利用する際には、個人情報が特定されることの内容処理し、本研究終了後には確実に処分します。

調査者
研究室名: 「開発と文化」 榎ゼミ (教授名: 関根久雄)
筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類4年次
202110223 竹下舜人
s2110223@u.tsukuba.ac.jp

B I U G M N X

名前（苗字のみでも可） *

短文回答

これまでにどのようなスポーツ経験がありますか？（オリエンテーリング以外に競技歴が長いものを一つ選択してください）

- 野球
- サッカー
- バスケットボール
- バドミントン
- 陸上競技
- バレーボール
- 体操
- 水泳
- なし
- その他...

オリエンテーリングの大会や練習会では、どのような人と会話したことがありますか？（複数選択可）

- 同じ大学の人
- 友人（他大学、親密なOB/OGなど）
- 初対面の人
- その他...

初対面の人と回答した方に伺います。

初対面の人とはどのような人でしたか？（複数選択可）

- 同年代（他大学の競技者など）
- 大学のOB/OG
- 年上（OB/OG以外の社会人の競技者など）
- 初対面の人と話したことない
- その他...

初対面の人とはどのような話をしましたか？（複数選択可）

- 参加した大会やコースについて
- SNSでのことについて
- 共通の知り合い・競技者について
- その他...

初対面の同年代の競技者に対して、他のスポーツをしている時と比較してどのようなふるまいをしますか？

- 親密（他のスポーツをしている時よりかなり碎けて話す）
- やや親密（他のスポーツをしている時より碎けて話す）
- 普通（他のスポーツをしている時と同じくらい冷淡、あるいは親密）
- やや冷淡（他のスポーツをしている時よりやや距離を置いて話す）
- 冷淡（他のスポーツをしている時より距離を置いて話す）
- 初対面の人とは話したことがない

差し支えなければ、その時どのように意識していたか教えてください。*

- 色々会話をしてみたい
- 投げかけられた話題に対してのみ返答しよう
- 話してほしくない
- 話したことはない
- その他...

同年代かつ初対面の競技者とは、その後どの程度つながりを持ちましたか？*

大体の傾向を教えてください。

- ご飯や遊びに出かける
- SNSでつながる
- 大会や練習会に参加したら話しかけに行く
- 大会や練習会で話しかけられたら会話する
- 大会や練習会ですれ違ったら会話をする
- もたなかつた
- その他...

今後、同年代かつ初対面の人とはどのような付き合い方を望みますか？*

- なにかにつけ相談したり、助け合う（全面的つきあい）
- 気軽に（積極的に）会話をする、ご飯に行く（部分的つきあい）
- 時々会話や挨拶をする（形式的つきあい）
- 関わりを持つ気はない
- その他...

初対面の年上の競技者に対して、他のスポーツをしている時と比較してどのようなふるまいをしますか？

- 親密（他のスポーツをしている時よりかなり砕けて話す）
- やや親密（他のスポーツをしている時より砕けて話す）
- 普通（他のスポーツをしている時と同じくらい冷淡、あるいは親密）
- やや冷淡（他のスポーツをしている時よりやや距離を置いて話す）
- 冷淡（他のスポーツをしている時より距離を置いて話す）
- 初対面の人とは話したことがない

差し支えなければ、その時どのようにことを意識していたか教えてください。

- 色々会話をしてみたい
- 投げかけられた話題に対してのみ返答しよう
- 話してほしくない
- 話したことはない
- その他...

年上かつ初対面の競技者とは、その後どの程度つながりを持ちましたか？＊
大体の傾向を教えてください。

- ご飯や遊びに出かける
- SNSでつながる
- 大会や練習会に参加したら話しかけに行く
- 大会や練習会で話しかけられたら会話する
- 大会や練習会ですれ違ったら会話をする
- もたなかつた
- その他...

今後、年上かつ初対面の人とはどのような付き合い方を望みますか？

- なにかにつけ相談したり、助け合う（全面的つきあい）
- 気軽に（積極的に）会話をする、ご飯に行く（部分的つきあい）
- 時々会話や挨拶をする（形式的つきあい）
- 囲わりを持つ気はない
- その他...

他スポーツよりオリエンテーリング競技者の方が会話しやすい場合、その違いが発生した要因には何があると考えますか？（複数選択可）

- 大会や練習会の頻度が多い
- 誘導区間や大会・練習会会場などで話しかける・話しかけられる
- 記録表やSNSで名前を見る
- 共通項の多さ（同じ地域クラブに所属、OB・OG、共通の知人など）
- 競技人口が少なく、なんとなく知っている
- 相手が気さくに話しかけてくる
- 他スポーツの方が会話しやすい
- その他...

同じ部活動の人とはどのような付き合い方を望みますか？

- なにかにつけ相談したり、助け合う（全面的つきあい）
- 気軽に（積極的に）会話をする、ご飯に行く（部分的つきあい）
- 時々会話や挨拶をする（形式的つきあい）
- 囲わりを持つ気はない
- その他...

2セクション中 2個目のセクション

卒論アンケート調査



説明（省略可）

オリエンテーリング競技界は「ムラ」らしいと言われることがあります、そう感じたことはありますか。

あった場合、そう考える理由、そのきっかけとなった場面を教えてください。

ない場合、そう考える理由があれば教えてください。

両方感じる場合は、両方書いてください。

長文回答

...

一般に「ムラ」らしさを感じる要因の一つに、同じ空間や時間、場を共有する機会の多さから組織のメンバーに一体感を覚えることがあります。

オリエンテーリングの組織内で一体感を覚えた経験がある場合、その要因を教えてください。（複数選択可）

- 全体のイベント（飲み会など）が月に1回程度ある
- 遠征の頻度が多い
- 練習の頻度が多い
- 遠征に伴う移動時間が長い
- 家が近い
- 部室がたまり場となっている
- そう感じたことはない
- その他...

他スポーツの組織内で一体感を覚えた経験がある場合、その原因を教えてください。（複数選択可）

- 全体のイベント（飲み会など）が月に1回程度ある
- 遠征の頻度が多い
- 練習の頻度が多い
- 遠征に伴う移動時間が長い
- 家が近い
- 部室がたまり場となっている
- そう感じたことはない
- その他...

一般に「ムラ」らしさを感じる要因の一つに、前述の一体感から他の組織に対して差別的な認識のもと、行動してしまうことがあります。

（※差別的な認識：自身の所属組織の方が優位であるという認識）

オリエンテーリングの組織内でその様な経験があった場合、その時の具体的な内容を教えてください。（複数選択可）

- 練習方法についての差別
- 技術力についての差別
- ふるまいについての差別
- したことがない
- その他...

一般に「ムラ」らしさを感じる要因の一つに、前述の一体感から他の組織に対して差別的な認識のもと、行動してしまうことがあります。

(※差別的な認識：自身の所属組織の方が優位であるという認識)

他スポーツの組織内でその様な経験があった場合、その時の具体的な内容を教えてください。（複数選択可）

- 練習方法についての差別
- 技術力についての差別
- ふるまいについての差別
- したことがない
- その他...

オリエンテーリングをすることのどこに価値を感じますか？（複数選択可）*

- 戯技 자체の面白さ
- 遠征を通して知らない土地や食事を楽しめること
- 遠征を通してしたメンバーとのかかわり
- 戯技を通して新しい人と知り合えること
- 戯技を通して自分自身が成長すること
- その他...

他スポーツをすることのどこに価値を感じますか？（複数選択可）*

- 戯技 자체の面白さ
- 遠征を通して知らない土地や食事を楽しめること
- 遠征を通してしたメンバーとのかかわり
- 戯技を通して新しい人と知り合えること
- 戯技を通して自分自身が成長すること
- その他...